

京都府埋蔵文化財情報

第 43 号

通り古墳群の発掘調査-----	石崎 善久---1
高田山経塚出土の中国製青白磁について-----	小池 寛---9
—平成3年度発掘調査略報—-----	13
12. 太田古墳群 17. 平安京・烏丸町遺跡隣接地	
13. 奈具・奈具岡遺跡・奈具岡北古墳群	
14. 細谷1号墳 18. 興戸遺跡第11次	
15. 池尻遺跡 19. 堂ノ上遺跡・恭仁京跡	
16. 算用田遺跡	
資料紹介 宮津城跡出土のヨーロッパ陶器-----	引原 茂治---22
センターの資料活用状況-----	25
府内遺跡紹介 54. 平安京西市跡-----	33
長岡京跡調査だより-----	37
センターの動向-----	40
受贈図書一覧-----	42

1992年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

図版 高田山経塚出土の中国製青白磁について



(1) 経塚2 青白磁検出状況



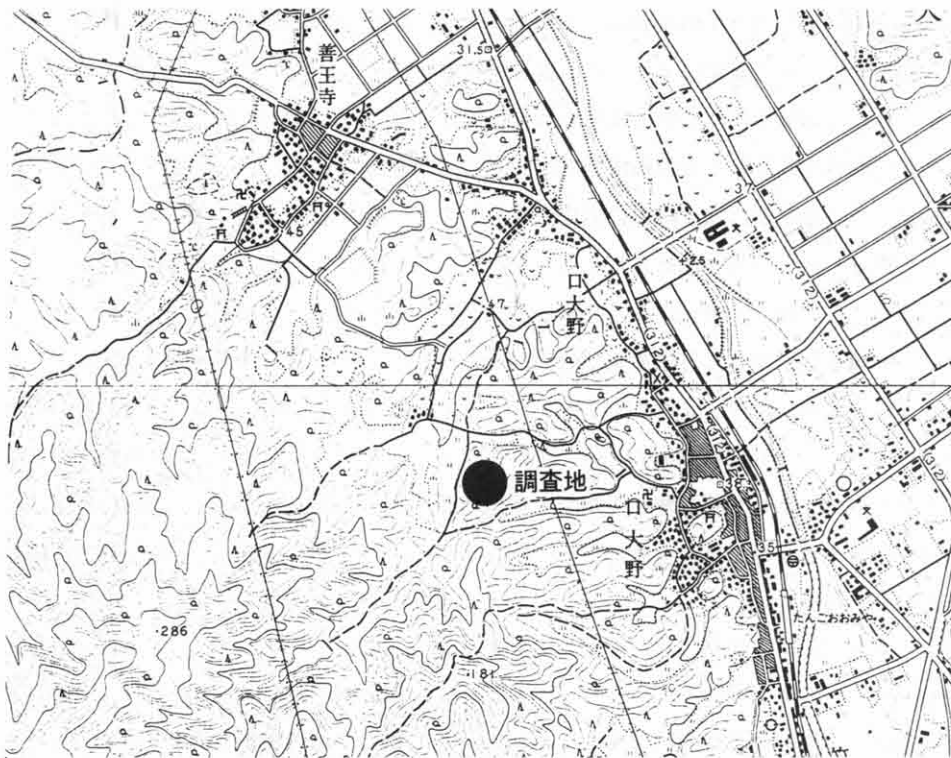
(2) 青白磁

通り古墳群の発掘調査

石崎 善久

1. はじめに

通り古墳群は、京都府中郡大宮町口大野に所在する。今回の調査は、農林水産省近畿農政局が計画・推進している「丹後国営農地」の大野団地造成工事に伴い、同局の依頼を受けて実施したものである。通り古墳群の周辺地域には、今回調査の通り古墳群をはじめ、前方後円墳と大型円墳からなる十二社山古墳群、中期より群形成の開始される小池古墳群、横穴式石室を内部主体とする十二社古墳群など、前期から後期を通じて墳墓が築造され続けている。通り古墳群の所在する現大宮町域では、大型前方後円墳あるいは円墳は確認さ



第1図 調査地位置図(1/25,000)

れておらず、中・小規模円墳あるいは方墳を主体とする古墳群が大部分を占めている。

2. 調査概要

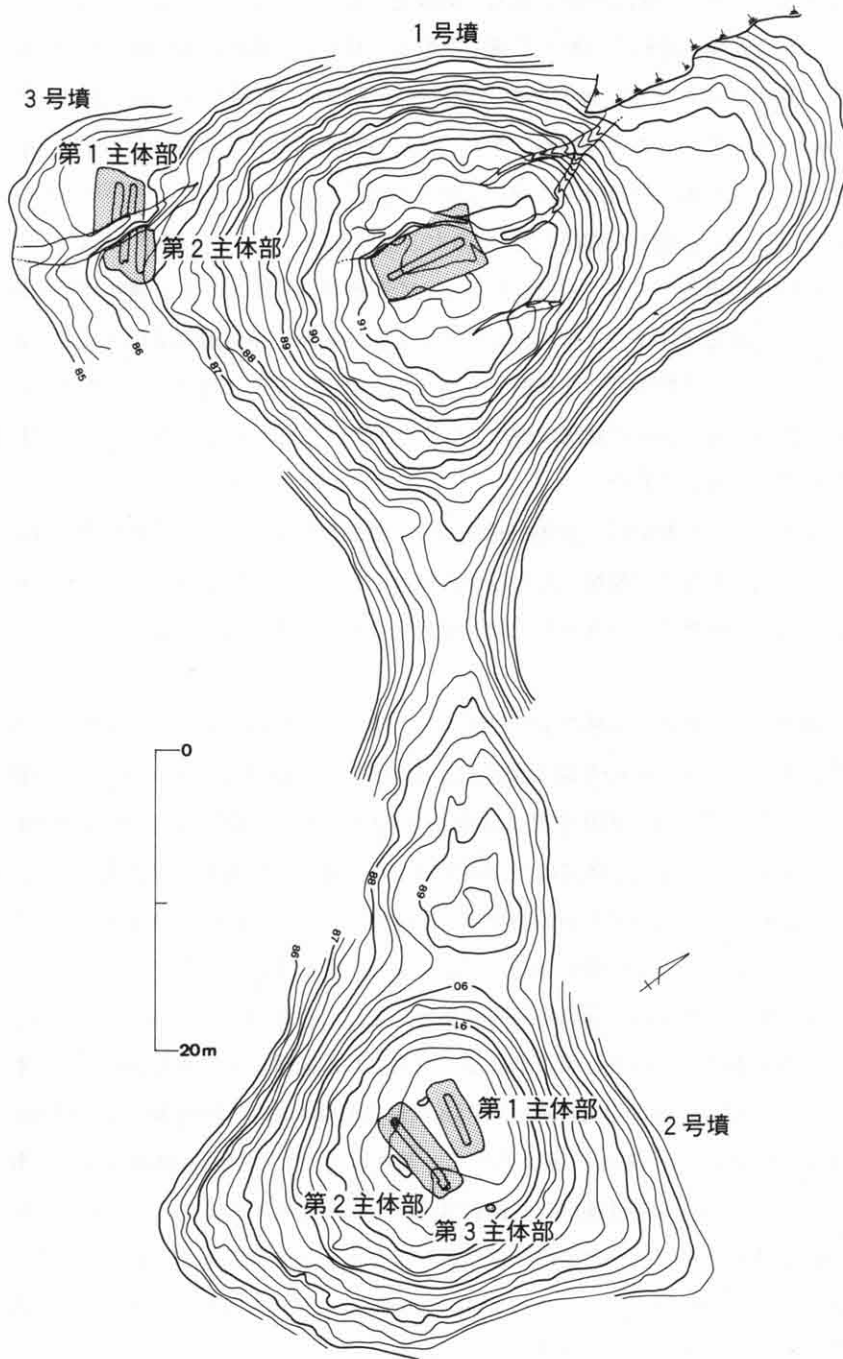
調査の結果、通り古墳群は、前期末頃の築造と考えられる2基の円墳と1基の方墳、計3基から構成されることが明らかとなった。以下、簡略に各古墳の概要について説明する。

①1号墳 1号墳は、古墳群西端に位置する。直径28m・高さ3.5mを測る円墳である。墳丘は地山成形により盛り土は認められない。また、墳丘は南北に走る地割れにより破壊を受け、墳丘の西側は西へ滑り落ちたような状況であった。なお、1号墳の北側に南北10m・東西12mを測る平坦面が存在する。この平坦面については、当初、別の古墳として調査を実施したが、埋葬施設の認められないこと、溝など1号墳と区画する施設のないことなどから1号墳の造成に伴い削り出された平坦面と考える。

埋葬施設は墳頂部平坦面中央で、南北に主軸をとる木棺直葬1基を検出した。今回は説明をはぶくが、主体部は経塚2基・性格不明の土坑1基に切られていた。墓壙は平面隅丸長方形を呈し、地山より2段に掘り込み、2段目に組合式箱形木棺を設置する構造を取る。規模は上段が長軸6.6m・短軸3.6m・深さ1.0m、1段目のほぼ中央に掘られた2段目は長軸6.0m・短軸0.9m・深さ0.5mを測る。木棺部分は幅0.44m・長さ5.2mを測る。なお、棺内南木口部分では土色の変化により、木口板を長側板が挟み込む構造であることを確認することができた。埋葬施設内では木棺痕跡部分を掘り下げていく過程で赤色顔料を検出した。この赤色顔料を取り除くと棺内南側で土師器鼓形器台1点を、北側東棺側付近で刀子1点を検出した。鼓形器台は受け部の劣化が著しいこと、器台北側に遺骸の腐食を示すような床面の黒変したところが認められることなどからみて、枕として転用されたものとする。1号墳ではこの他に、墳丘から土師器二重口縁壺、小形丸底壺、器台などが出土した。

②2号墳 2号墳は1号墳の東、狭長な鞍部を介して約30m離れた丘陵頂部に位置する。墳丘は直径20m・高さ2mを測る円墳である。1号墳同様地山成形により盛り土は認められない。また、墳丘西側は幅約2mを測る溝により自然地形と区画する。埋葬施設は東西に主軸を取る2基の木棺直葬と1基の土器棺の計3基を検出した。2基の木棺直葬のうち、北側に位置するものを第1主体部、南に位置するものを第2主体部、土器棺を第3主体部と呼称し、説明を加える。

第1主体部は、墓壙平面隅丸長方形を呈し、地山より2段に掘り込み、2段目に組合式箱形木棺を設置する構造を取る。規模は上段が長軸5.1m・短軸2.1m・深さ0.9m、1段目のほぼ中央に掘られた2段目は長軸4.3m・短軸0.6m・深さ0.3mを測る。棺は幅0.34m・長さ3.5mと考えられる。遺物の出土は認められなかったが、棺内西側で歯牙4点を検出した。



第2図 調査前地形測量図

このことより被葬者は西頭位であることが確認された。

第2主体部も第1主体部同様、墓壇平面隅丸長方形を呈し、地山より2段に掘り込み、2段目に組合式箱形木棺を設置する構造を取る。規模は上段が長軸6.5m・短軸2.4m・深さ0.8m、1段目のほぼ中央に掘られた2段目は長軸5.8m・短軸0.7m・深さ0.1mを測る。棺は幅0.4m・長さ5.3mと考えられる。また、2段目両木口部分には偏平な石を用いた石積みが認められた。西木口の石積みは崩れて旧状を留めていなかったが、遺存状況のよい東木口部分では2段の石積みを確認した。棺の木口板の痕跡については確認することができず、また、石積みの構造からみて木口板がなかった可能性も考えられる。遺物は、棺外出土のガラス玉・土師器高杯1点と棺内出土の刀子1点がある。棺外遺物は棺上に置かれたと考えられ、ガラス玉は散らばった状態でガラス小玉81点・ガラス勾玉1点を検出した。高杯は正位で棺内に落ち込んだ状態で検出された。棺内の刀子は切先を東に向け、棺内東側、南長側板寄りで検出された。

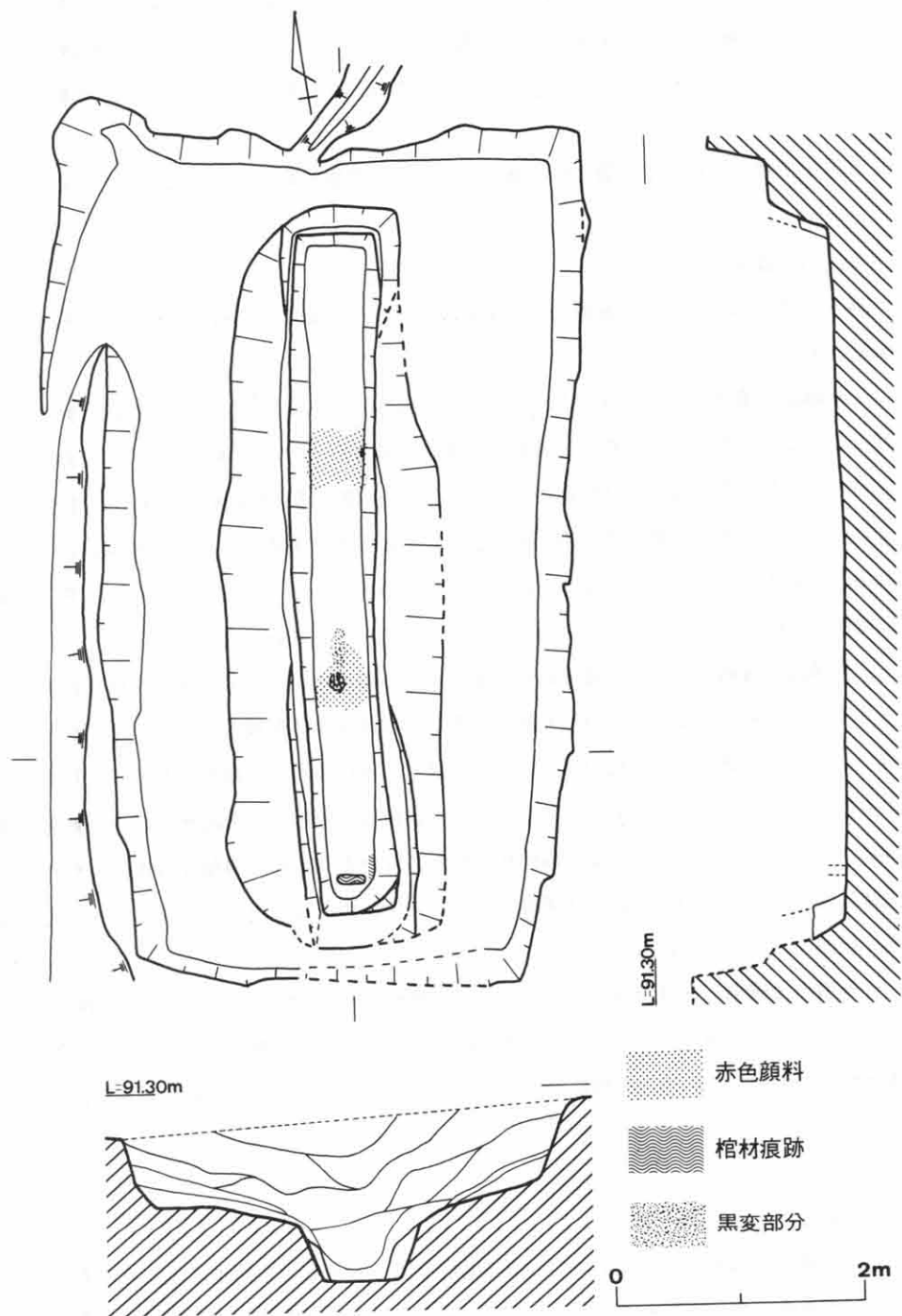
第3主体部は、長軸0.5m・短軸0.4mを測る不整円形の墓壇内に、土師器甕を身に、脚部を打ち欠いた高杯を蓋に転用した土器棺が納められていた。副葬品は認められない。

2号墳ではこの他に、墳丘から土師器小形丸底壺・二重口縁壺・器台・高杯などが出土している。

③3号墳 3号墳は1号墳の南に位置する。墳丘は丘陵稜線を「L」字状に削り出し、高位側に幅0.6m・深さ0.3mを測る直線的な溝を設け、南北8m・東西14mの平坦面を確保しただけの方墳である。墳丘中央には南北方向の地滑りが認められ、最大約50cmの比高で西にずり落ちている。主体部は平坦面中央で東西軸の木棺直葬2基を検出した。切り合い関係が認められ、先行する主体部を第1主体部、後続するものを第2主体部として説明を加える。なお、この主体部も地滑りにより東西に分断された状況であった。

先行する第1主体部は、墓壇平面隅丸長方形を呈し、地山より2段に掘り込み、2段目に組合式箱形木棺を設置する構造を取る。復原される規模は上段が長軸5.5m・短軸2.1m・深さ0.7m、1段目のほぼ中央に掘られた2段目は長軸4.7m・短軸0.8m・深さ0.3mを測る。また棺は幅0.34m・長さ3.6mと考えられる。遺物は棺上に土師器高杯1点及び、脚部を取られた器台1点が、高杯は横位で、器台は逆位で検出された。また、この周囲には多量の赤色顔料が認められた。この他に、ガラス小玉2点・碧玉製管玉1点が出土した。玉類は、棺床面より浮いた状況であったが、そばに松の根が入り込んでおり、本来棺内にあったものが二次的な移動を受けた可能性も考えられる。

第2主体部は、第1主体部同様、墓壇平面隅丸長方形を呈し、地山から2段に掘り込み、2段目に木棺を設置する構造を取る。ただし、棺底部が緩やかな「U」字形を呈しており、



第3図 1号墳主体部実測図

「U」字状底を有する木棺の使用が考えられる。復原される規模は上段が長軸5.8m・短軸2.2m・深さ0.9m、1段目のほぼ中央に掘られた2段目は長軸5.2m・短軸0.6m・深さ0.2mを測る。棺は幅0.5m・長さ4.8mを測る。遺物は墓墳埋土内から細片化した土師器壺1個体分、棺上から脚部を打ち欠いた土師器高杯1点、棺内から微量ではあるが赤色顔料が検出された。

3号墳ではこの他に1号墳との区画溝内から、土師器低脚杯が1点出土している。

3. 出土遺物

通り古墳群から出土した遺物には、埋葬施設に伴う土師器・玉類・鉄器、墳丘出土の土師器がある。

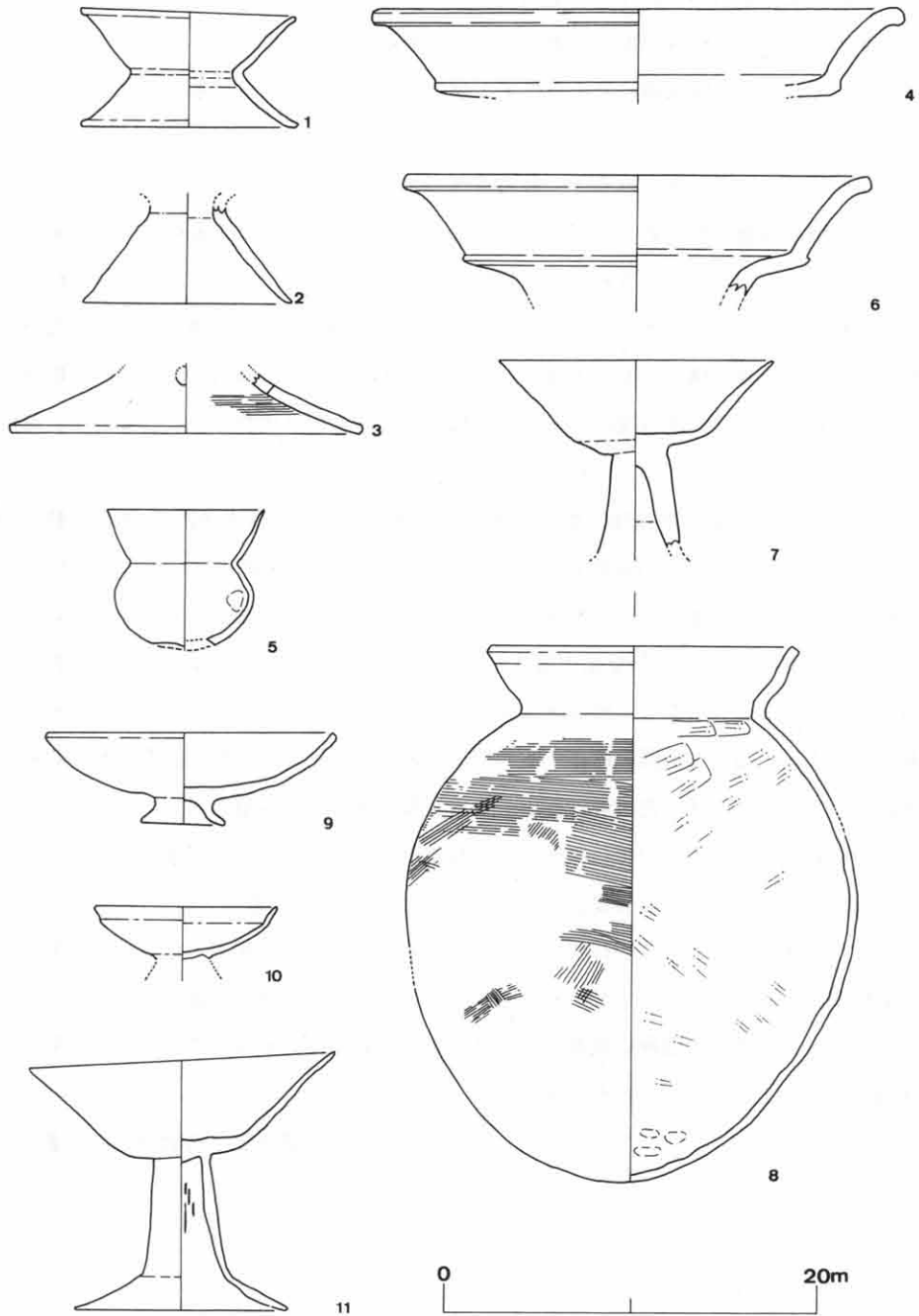
1号墳出土遺物 1は棺内出土、2・3・4は墳丘から出土した。1は鼓形器台である。枕として転用されていたためか、調整等不明瞭であるがナデが主体となるようである。稜を持たず、鼓形器台としては小形品である。2・3は墳頂部平坦面から近接して出土した。2は器台脚部である。細片のため正確な器径などは不明である。3は、高杯脚部と考えられる。円形のスカシが認められるが細片のため全容をうかがうことはできない。5は二重口縁壺の口縁部である。ややぶい稜をもち、復原口径28.6cmを測る。

2号墳出土遺物 5・6は墳丘北斜面流土中からの出土、7・8は第3主体部の土器棺として使用されていた。5は小形丸底壺である。口縁部は体部最大径より大きい、やや短い。底部には焼成後の穿孔が施される。6は、二重口縁壺の口縁部である。1号墳出土のものに比してシャープな造りである。7は土器棺蓋に転用された高杯である。脚部を意図的に打ち欠かれている。8は土器棺身に転用された甕である。倒卵形の体部にやや外反気味に開く口縁をもつ、肩部には明瞭なヨコハケが認められ、内面はヘラケズリ、底部内面に指頭圧痕が観察される。

3号墳出土遺物 9は溝埋土より出土した低脚杯である。磨耗著しく調整は不明瞭だが、ていねいな作りであり、杯部内面には部分的にヘラミガキが観察される。10・11は第1主体部棺上で出土した。10は小形器台である。脚部を意図的に打ち欠かれている。11は高杯である。

4. まとめ

今回の調査の成果を、丹後半島の古墳の動向などを参考として簡単にまとめてみたい。まず、古墳群の築造時期についてであるが、細かく出土遺物を検討する必要があると考えられるが、概ね古墳時代前期末頃と考えてよいものと思われる。



第4図 出土遺物実測図(1~4.1号墳 5~8.2号墳 9~11.3号墳)

群内での築造順については、さらに詳細な検討を加えなければならないが、3号墳は立地からみて1号墳に後続する点はまちがいない。また、3号墳第1主体部出土の高杯と、2号墳第2主体部出土の高杯とは型的に差異を見いだせない。これらの点からみて、1号墳がまず築造され、続いて2号墳・3号墳が築造されたと考えられる。ただし、出土遺物からみて、大きな時期幅は考えられず、極めて短期間のうちに造墓活動を終了したとみられる。

個々の古墳についてみると、最大規模の1号墳が1墳1主体であるのに対し、2号墳・3号墳は複数埋葬である点が注目される。中でも、2号墳は2基の木棺直葬墓を計画的に配置している点が注目される。3号墳は、墳丘に限ってみるならば、弥生時代の台状墓の延長上に位置づけることができ、視覚的な墳丘を持つ1・2号墳より従属的な階層が想定できる。特殊な構造をもつ主体部として、棺木口部分に石積構造をもつ2号墳第2主体部が注目される。前期古墳の中で同様の構造をとるものは現在のところないが、峰山町カジャ古墳では棺木口の一方に石積みをもつ例が知られている。

丹後半島では前期後半以降、埴輪・葺石を完備した、大型前方後円墳(加悦町蛭子山古墳・網野町銚子山古墳・丹後町神明山古墳)や竪穴式石室を内部主体にもつ大型円墳、峰山町カジャ古墳など畿内の色彩を強く帯びた首長墓が相次いで築造される。そのいっぽうで、在地的要素の強い、中規模古墳も数例確認されている。例えば、加悦町加悦丸山古墳・同町愛宕山3号墳など、外表施設を完備せず、内部主体も在地的な箱式石棺や木棺直葬を採用する。通り古墳群の所在する竹野川上流域においては、畿内の大型墳の存在は確認されておらず、通り古墳群に後出する首長墓である大谷古墳もまた、鏡・玉・剣をもつものの箱式石棺を内部主体に採用する中規模円墳である。通り1号墳は、墳丘・主体部の規模をとればこれらの中規模古墳に劣るものではないが、副葬品という点で考えた場合、より下位にあると考えざるを得ない。また、鼓形器台を枕に転用している点、3号墳から低脚杯が出土していることなどから山陰地方との強いかわりが推測される。このような点から考えて、通り古墳群の被葬者は山陰地方との強いかわりの中で、勢力を持ちえた、在地首長として評価することができよう。

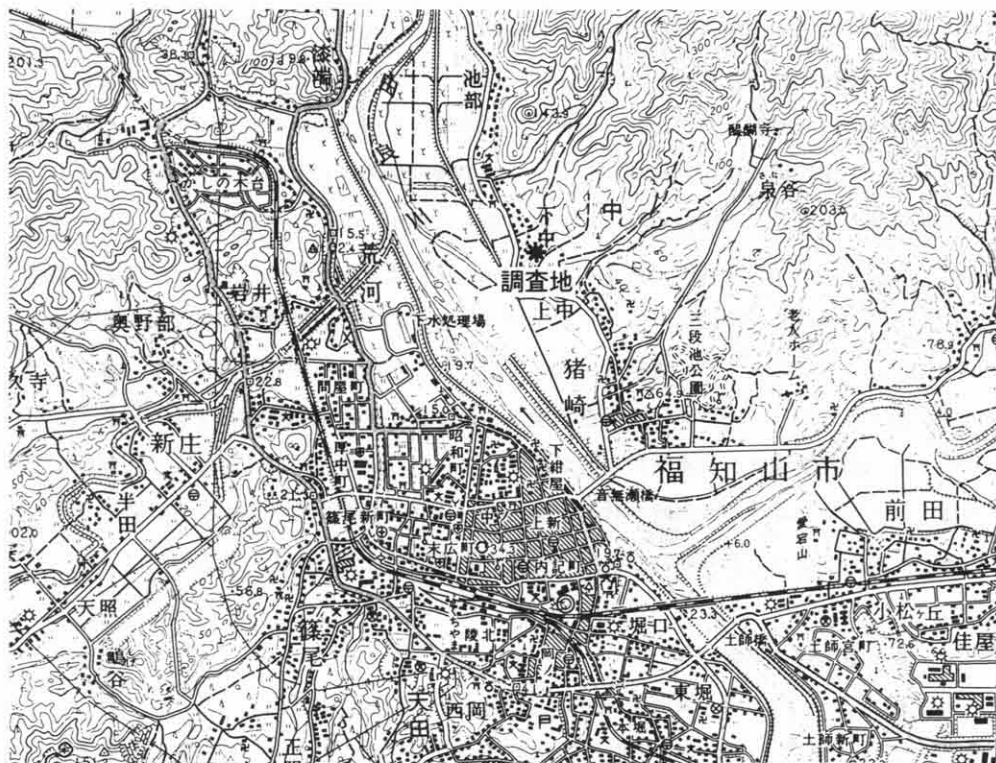
(いしざき・よしひさ=当センター調査第2課調査第1係調査員)

高田山経塚群出土の中国製青白磁について

小池 寛

1. はじめに

高田山経塚群は、京都府福知山市庵我高田山に所在する高田山2号墳の墳頂部中央で新たに確認したもので、中世墓1基・経塚2基・不明土坑1基を「群」として検出した。ここに紹介する中国製青白磁の小壺・小皿は、経塚2(S X 9103)から出土した資料で、京都・鎌倉などの中世段階における主要都市や海外との貿易を行う主要な港などでは、破片資料の出土は知られているが、墳墓・経塚から完形品として確認された例としては、極めて希有な資料と言える。本報文は、経塚2についての事実関係を整理し、青白磁の実測



第1図 調査地位置図(1/50,000)

図・写真により形態的特徴や法量について述べ、埋納時期を明らかにすることを目的としている。そのため、「群」として捉えることができた中世墓・経塚群についての解釈は、今後、機会を設定し、記述することにした。

2. 検出遺構の概要

高田山2号墳の墳頂部は、約10m四方の平坦なテラスであり、その中央で中世墓・経塚群を確認した。中世墓は、墓壙内を人頭大の礫で充填し、墓壙中央に人骨を多く含む納骨用の中世須恵器甕を据え、それを取り囲むように瓦器椀・中世須恵器甕・土製蔵骨器2点が埋納されている。特に、2点の蔵骨器の底部には、北宋銭が10余枚ずつ埋納されている。経塚1(S X 9102)は、土坑内を人頭大の礫で充填し、中世墓の一部を切って穿たれている。埋納当初の状態を保った土製経筒2点・瓦器椀・北宋銭を確認しており、特に、経筒内からは、竹製の経筒外面に塗布したと考えられる漆被膜と宝珠つまみをもつ木製蓋が複数固体出土している。不明土坑(S X 9104)は、土坑上面に人頭大の礫を一石置き、炭混じりの埋土から中世須恵器甕の口縁部片を1点確認した。これらの遺構群については、今後の資料整理によって詳しく報告する予定である。

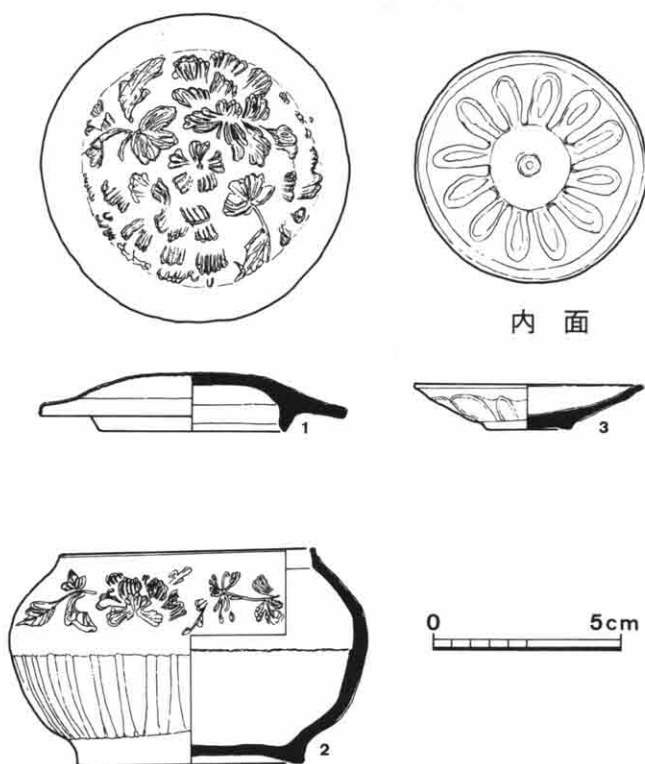
ここに紹介する中国製青白磁が出土した経塚2(S X 9103)は、長軸1.4m×短軸0.9mの規模を有し、平面形態は、南側がやや尖頭状になる不整の楕円形を呈している。土坑は、人頭大の礫によって充填されており、土坑上半部の礫の崩落は認められるものの、土層断面の観察から、土坑掘削面よりも高いレベルまで礫が集積されていたことが確認できた。土坑北半部の深さは、遺構検出面より0.3mを測り、平坦に掘り込まれている。一方、南半部は、後述する土器群を埋納できるように0.6mの深さまで掘り込まれている。なお、南端部は検出面で確認した輪郭よりもオーバーハングしており、充填礫群の最上部で北宋銭が出土した。ここに紹介する中国製青白磁の小壺は、南半部の中間充填礫群の間に横転した状態で出土しており、同小皿は、小壺を検出した礫群より下位充填礫群下から出土している。土坑内の充填礫は、基本的に崩落が起こらないように集積されているが、土坑南端部の最下段の礫は、埋納した当時の状態を保っている瓦質経筒を取り囲むように直立させている。なお、小壺や瓦質経筒内からは、人骨や木製経筒などは出土していない。

3. 青白磁小壺・小皿について

小壺蓋(1)は、口径5cm・最大径8.2cm・器高1.6cmを測る。天井部には、型造りによる草花文(牡丹文)が施されている。内面には釉薬はかかっておらず、ナデ痕が明瞭に残存している。小壺(2)は、口径6.4cm・体部最大径9.4cm・底部径6cm・器高5.6cmを測る。短く直

立する口縁部で、器高のほぼ中央部に最大径をもつ。体部外面肩部には、型造りによる草花文(牡丹文)が施されており、下半部には、放射状の印花文が施されている。

なお、内面には上半部と下半部を接合した稜線が明瞭に残っており、外面は接合部をていねいにナデ消している。底部外面には釉薬は施されていない。小皿(3)は、口径6.2cm・底径2.3cm・器高1.2cmを測る。削り出し高台



第2図 青白磁小壺・小皿実測図(1/2)

とわずかに内湾する皿部をもつ。型造りにより内面に12葉の花弁文が観察でき、外面には、型押し痕が明瞭に残っている。

これら3点の釉薬の色調は、乳青色を呈しており、同一の生産地である可能性が高い。また、全体的な成形は、稚拙な部分も多く、中国南部に点在する民窯で焼成されたものと考えられる。

ここに紹介した青白磁の小壺・小皿は、そのもの自体の編年的研究が行われていないため、製作年代を明確にすることは困難であるが、中世墓から出土した中世須恵器甕や経塚から出土した瓦器椀などから、埋納時期を13世紀前半に位置付けることが可能である。3点の釉薬の色調などに共通要素を見い出せることから、3点がセットとして同時期に輸入されたと考えられ、当該地への移入は「都」を介在にしていると考えられる。また、出土状態は、経塚の充填礫の間に横転したり礫下から出土していることから、特別な容器に納められた形跡はなく、瓦質経筒の埋納後、礫を充填する過程で、何らかの儀礼の終了後に小皿・小壺の順で埋納されたと考えられる。今後、中世墓・経塚群の解釈の中でその性格を考える必要があるが、単に考古資料としてだけでなく、埋納時期などが明らかな美

術工芸品としても重要な資料である。

(こいけ・ひろし=当センター調査第2課調査第2係調査員)



経塚2(S X9103)

平成3年度発掘調査略報

12. 太田古墳群

所在地 竹野郡弥栄町和田野小字太田66番地ほか

調査期間 平成3年5月1日～6月7日

調査面積 約60m²

はじめに この調査は、農林水産省近畿農政局が進めている「丹後国営農地開発事業」の和田野団地造成工事に先だち、同局の依頼を受けて実施した。

太田古墳群は、丹後半島最大の河川である竹野川によって形成された左岸の丘陵上、現在の中郡峰山町矢田・橋木・竹野郡弥栄町和田野の字境に位置する。京都府教育委員会が実施した分布調査によって、方墳・円墳51基が確認されている。また、丘陵上にはこの古墳群のほかに、太田南古墳群・下後古墳群・水晶山古墳群など、数多くの古墳が分布する。

今回は、造成地内に円墳3基がかかることから、確認のための試掘調査を行った。

調査概要 造成にかかる古墳は、丘陵尾根筋に構築されており、山道によって半壊状態の古墳(5号墳)と、隣接する古墳(6・7号墳)である。7号墳については、墳丘裾部のみ造成にかかることから、その部分の調査となった。丘陵尾根筋に3基の古墳にかかるように試掘を行った。その結果、5号墳は、後世の山道を作る際に、排土の一部を盛った高まりであり、6号墳は、5～10cmの表土下は地山となり、いずれも古墳としての遺構・遺物は認められなかった。7号墳については中心部が造成地外となるため、明確な成果は得られなかった。しかし、6号墳と7号墳の間から区画溝と思われる溝を検出したことから、7号墳のみ円墳であるものと思われた。溝内に遺物はなく、古墳の時期については不明である。調査は、溝部分のみ面的調査を行い、溝の広がりを確認し終了した。

(岡崎研一)



調査地位置図(1/50,000)

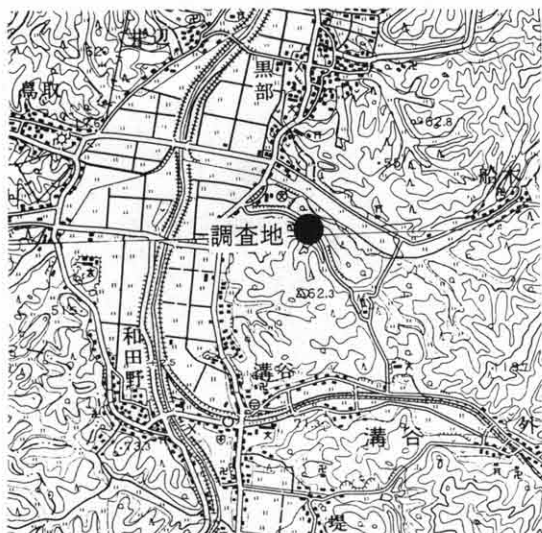
13. 奈具・奈具岡遺跡・奈具岡北古墳群

所在地 竹野郡弥栄町溝谷
 調査期間 平成3年7月1日～7月17日
 調査面積 約900m²

はじめに この調査は、農林水産省近畿農政局が進めている「丹後国営農地開発事業」の奈具団地造成工事に先だち、同局の依頼を受けて実施した。

今回の調査地は、弥生時代中期～後期にかけての集落遺跡として、また丹後地方の弥生土器研究の資料にもなった奈具・奈具岡遺跡の間の谷部に位置する。府立峰山高校弥栄分校(奈具遺跡)南側から外村に通じる農道沿いの田畑部で、高校から弥栄町清掃工場付近までが調査地である。このように弥生時代の2大集落遺跡に挟まれたところであることから、谷中央線で遺跡名称を分けることにした。奈具岡遺跡東側の丘陵に奈具岡北古墳群があり、その一部が今回の造成工事にかかることから、奈具岡北古墳群として調査を行った。今回の調査は、遺構・遺物等の確認調査であるため、20か所の試掘を行ったにすぎない。

調査概要 試掘調査の結果、奈具岡北古墳群から、焼土を確認した。住居跡に伴うものと思われ、この付近には住居跡が存在するものと考えられる。奈具・奈具岡遺跡(田畑部)



調査地位置図(1/50,000)

については、奈具遺跡の存在する丘陵裾部にわずかな微高地があり、微高地に沿って柵列がかなり良好な状態で残っていることがわかった。その付近からは、弥生時代中期の土器が多量に出土した。この他に、木製品なども出土している。面的な調査を行っていないため、その全容は不明であるが、この微高地付近には、弥生時代中期の住居跡や溝跡があると思われる。今後の発掘調査に期待する。

(岡崎研一)

14. 細谷 1 号墳

所在地 綾部市下位田町細谷
 調査期間 平成3年9月18日～10月30日
 調査面積 約600m²

はじめに 細谷1号墳の発掘調査は、(社)京都府農業開発公社が計画する公社営畜産基地建設事業に伴い、同公社の依頼を受けて実施した。細谷古墳群は、遺跡地図では4基からなる後期古墳群とされているが、正確な基数や位置関係が把握されていなかったため、今回の事業計画に伴い京都府教育委員会が分布調査と範囲確認調査を実施した。その結果、尾根の先端に基本的に1基ずつ分布し、合計6基からなる古墳群であることが判明した。

調査概要 細谷1号墳は、後世の牧草地開発により完全に墳丘が削平されており、墳形・墳丘規模などは不明である。埋葬主体部は玄室長3.8m・玄室幅1.5m、羨道幅は玄門部で1.3mを測る無裾の横穴式石室である。羨道部と床面の大半は、攪乱を受け、土器片や装身具類が原位置を保たない状態で出土しているが、玄室奥壁から50cmの範囲は、攪乱を受けておらず、初葬・追葬の二面の床面を検出した。

第1次床面からは、蓋杯・高杯などの須恵器が床面直上で出土している。一方、第2次床面は、奥壁から50cmのところには人頭大の礫を数個用いて区画しており、蓋杯等の須恵器や、半球体を呈する土師器・鉢が出土している。玄室内では、攪乱土中から、金環・斑劔岩製丸玉・滑石製白玉・水晶製切子玉・鉄鏃などが出土している。

まとめ 今回、調査を行った1号墳では、墳丘は完全に削平されて残存していないが、石室奥壁部では、2面の床面を検出した。第1次床面は、TK209前後に比定でき、第2次床面は、小区画からの一括土器群からTK217でも古相のものとわかる。

(小池 寛)



調査地位置図(1/50,000)

15. 池尻遺跡

調査地 亀岡市馬路町池尻
 調査期間 平成3年8月19日～平成4年1月30日
 調査面積 約1,100m²

はじめに 池尻遺跡は、亀岡市馬路町池尻に所在する集落遺跡である。東西約750m・南北400mの範囲に土師器や須恵器の散布が認められ、周知の遺跡となっている。今回、遺跡内で府道の改修工事が計画されたため、当センターでは京都府土木建築部の依頼を受け、遺構・遺物確認のための試掘調査及び発掘調査を実施した。

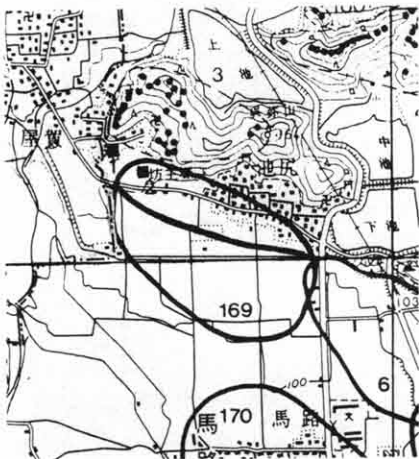
調査概要 調査対象地が東西約1kmに及ぶため、対象地内にまず25か所の試掘トレンチを設定して遺物の包含状況・遺構の有無を確認した。その結果、第1・第25トレンチ、第9トレンチ、第17～22トレンチにおいて、弥生時代の溝や奈良時代の布目瓦を確認したため、それぞれ拡張して面的調査を計画した。拡張調査予定地内に未買収地を含むため、本年度は4か所(第1～第4区)に限って調査を行った。

第1区では、弥生時代前期新段階の土器を含む溝3条と落ち込みを検出した。第2区では、弥生時代前期新段階の土坑、溝の一部などを検出している。土坑の1つは、長方形で土器が供献されていることなどから墓塚と考えられる。第3区では、8世紀初頭頃の土器を多量に含む土坑と、掘立柱建物跡を検出した。土器は須恵器・土師器があるが、須恵器

長頸瓶が主体をなす。土器は内面に漆が付着するものが多く、漆容器として用いられたものと考えられる。付近に漆に関する工場の存在が考えられる。第4区は、旧河道によって遺構面が削平されており、状況は不明である。

以上のように、今回の調査では、弥生時代前期と8世紀初頭頃の2時期の遺構・遺物を確認した。未調査部分には白鳳期に遡る可能性のある瓦を包含する溝などもあり、今後の調査が期待される場所である。

(田代 弘)



調査地位置図(1/25,000)

16. 算用田遺跡

所在地 乙訓郡大山崎町円明寺字宝本
 調査期間 平成3年5月26日～平成4年1月31日
 調査面積 試掘 約600m²
 本調査 約1,000m²

はじめに 今回の調査は、山崎郵便局の建設工事に伴い、近畿郵政局から依頼を受けて実施した。算用田遺跡は、過去の発掘調査によって古墳時代前期を中心とする遺跡であることが知られている。今回の調査地は、算用田遺跡の南端に位置するため、遺構・遺物の有無を確かめるために、試掘調査を行った。弥生時代の終末から飛鳥時代までの遺物を多く含む包含層を確認したため、本格的な調査が必要であると認められたので、京都府教育委員会をはじめとする関係機関と協議の上、本調査を実施した。

調査概要 今回の調査によって弥生時代後期の竪穴式住居跡、古墳時代前期の溝・土坑、古墳時代中・後期の竪穴式住居跡・土坑、飛鳥時代の竪穴式住居跡・土坑を検出した。古墳時代前期の溝からは、東海地方の影響を受けた土師器や生駒山西麓の胎土をもつ甕が出土している。遺物の多くが布留式土器の古相の特徴を持っている。古墳時代の土坑からは、TK208の時期の須恵器など比較的古い須恵器が出土するものもある。飛鳥時代の土坑からは、7世紀の第二四半期のものと考えられる暗紋を持つ土師器、須恵器が出土している。

須恵器の杯身の内面に漆が付着したものがあ
 ることと、漆の被膜が出土していることから、
 漆を用いる作業に関連する遺構と想定でき
 る。飛鳥時代の土器は、乙訓郡内ではまれな
 時期のまとまった遺物である。今後、慎重に
 整理作業を進めたい。

(中川和哉)



調査地位置図(1/50,000)

17. 平安京・烏丸町遺跡隣接地

所在地 京都市南区東九条下殿田町70

調査期間 平成3年8月19日～11月15日

調査面積 約270m²

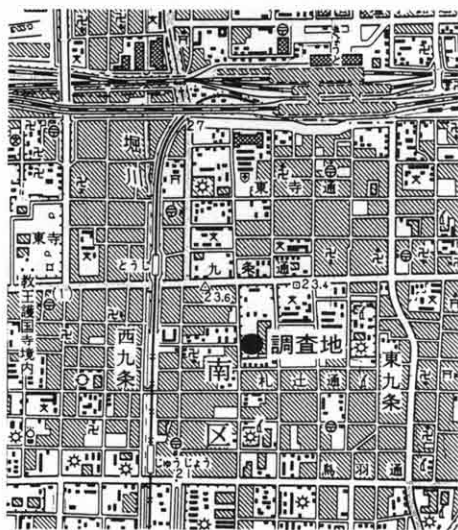
はじめに 今回の調査は、勤労者総合福祉センター建設に伴うもので、京都府労働部の依頼を受けて実施した。調査地は、平安京の南限である九条大路、及び縄文時代晩期以降の遺物散布地である烏丸町遺跡の南側に隣接する。京都市交通局の市バスターミナルである九条車庫の敷地の南半部に位置する。以前は、市電の車庫でもあった。

調査概要 今回の調査では、調査地内に3か所のトレンチを設定し、遺構・遺物の有無を確認する試掘を行った。地下にはとところどころ、市電車庫等のコンクリート基礎が残る。

調査地の基本的な層序は、次のとおりである。現地表下約1mまで、アスファルトやバラスなどの現代の整地層や、市電車庫当時の盛り土及びその解体に伴う攪乱層である。その下に層厚約70cmの旧耕土層がある。この旧耕土層は数層に分かれ、それぞれに畑の畝・細い溝・流路などが検出できた。出土遺物からみて、この旧耕土層は江戸時代初期から市電車庫ができるまでと考えられる。旧耕土層の下は、砂礫層である。今回確認した限りでは、現地表下約5mまで砂礫層が続く。

さらに深くまで及ぶとみられるが、多量の湧水のため確認できなかった。この砂礫層から、弥生時代から中世の遺物が出土した。

まとめ 今回の調査では、近世から近代にかけての耕作地の遺構を検出したのみで、平安京及び烏丸町遺跡に関連する遺構は存在しなかった。耕土層下の砂礫層は、鴨川などの河川の氾濫によって堆積したものと考えられる。また、中世以前の遺構は、その氾濫で流出したものとも考えられる。砂礫層からの出土遺物は、上流からの流れ込みであろう。(引原茂治)



調査地位置図(1/25,000)

18. 興戸遺跡第11次

所在地 綴喜郡田辺町大字興戸小字犬伏
 調査期間 平成3年10月1日～11月26日
 調査面積 約500m²

はじめに 今回の調査は、国道307号道路新設改良事業に伴うもので、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。

調査対象となった興戸遺跡は、南山城屈指の広大な遺跡で、現在までに10回の調査が実施されている。その結果、縄文時代晩期から現代に至る複合遺跡であったことが判明してきた。特に、奈良時代から平安時代前期までは、古代幹線道路と同方向(N33°W)の方形区画が、少なくとも、道路より東300mぐらいまで存在したことが判明した。

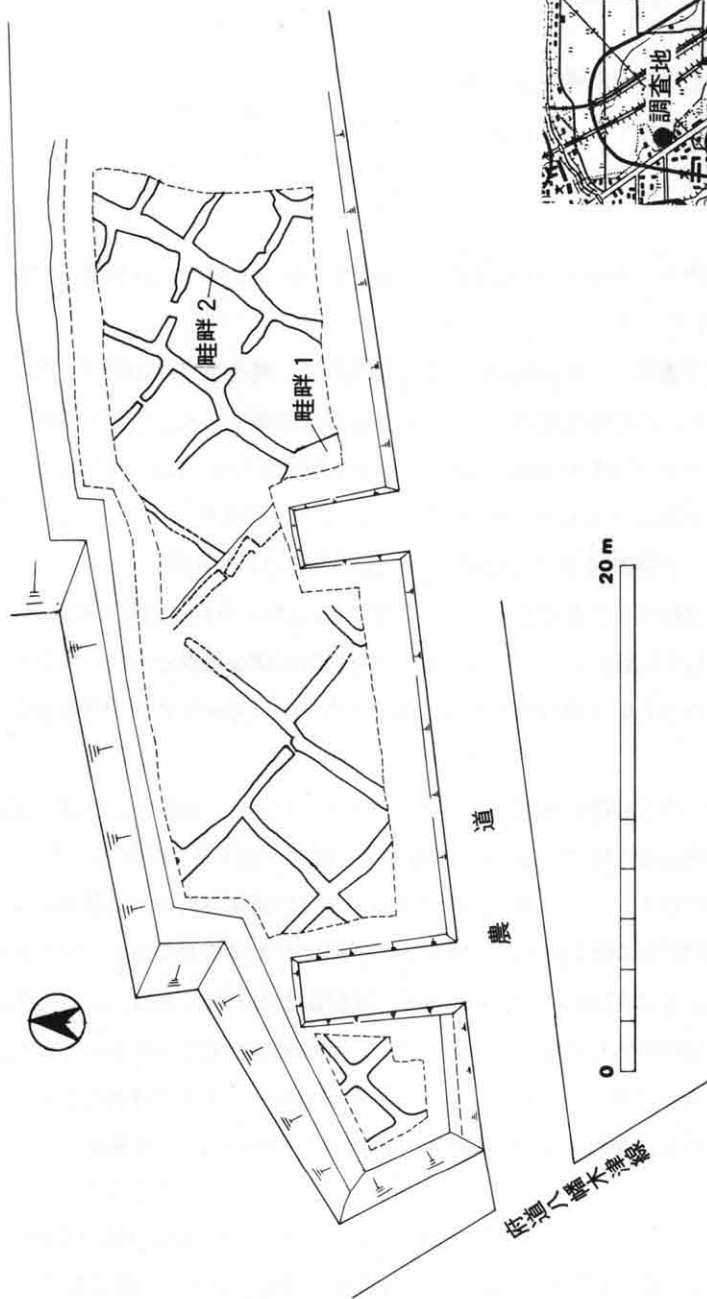
今回の調査地は、その道路(山陽道・山陰道併用の道)の東隣りに当たる。

調査概要 基本的な遺構面は3面確認された。おおよそ、近世・中世・古代と把握した。地形は西が高く、東に行くに従って下がっている。更に西方には谷地形があり、大局的にみれば、谷の出口、すなわち扇状地の起点部分に相当する。中・近世は若干の溝が確認されたのみであった。

古代面では水田耕作に伴う畦畔を検出した。ベースとなる土層は、西区と中央区は紫暗灰色粘質土で、東区は灰色粘土層である。この土層の上に畦畔を盛り土して形成している。やや白い粘土が混じるだけで、ベース層と同様である。畦畔の規模は大・小2種類ある。大(畦畔1と同2、図面参照)は幅1m・高さ20cmで、断面はかまぼこ形である。中央区の一部が削平されている。小は幅40cm・高さ5cmで、断面は大と同様である。これらの大小の畦畔によって、計24枚の水田が確認できた。但し、稲株跡は断定できなかった。水田は白色の洪水砂でおおわれており、一気に埋没したことがわかる。若干の遺物によれば、古墳時代後期頃と思われる。また、1か所で畦畔と重複する3個のピットを検出し、この方向が、古代幹線道路と同様であるので、奈良時代以前であることが傍証できる。

まとめ 畦畔の大小によって、大区画の存在が確認されたが、調査面積が狭小であるため、これが代(しろ)制の一例になるかどうかは、今後の周辺調査によって決定される。

(伊野近富)



調査地平面図

19. 堂ノ上遺跡・恭仁京跡

所在地	相楽郡山城町大字北河原小字堂ノ上及び大字平尾小字東黒部
調査期間	平成3年7月19日～11月26日
調査面積	堂ノ上遺跡、約600m ² ・恭仁京跡、約170m ²

はじめに 今回の堂ノ上遺跡の調査は、府道上狛・城陽線建設に先立って行われたもので、堂ノ上遺跡は椿井大塚山古墳の北方約500mに位置している。京都府教育委員会作成の『京都府遺跡地図』に載せられてはいないが、周辺から古墳時代の土器等が表採されており、京都府教育委員会との協議のうえ、発掘調査を行うこととなった。また、恭仁京跡調査地は平尾城山古墳の北西約250mに位置しており、足利健亮氏の推定された右京北京極ラインにあたる地点である。

調査概要 堂ノ上遺跡は、路線内の調査であるため、調査地内に4つの南北に長い試掘トレンチを設けて調査に当たった。その結果、調査地内、北側の竹林として利用されていた部分では後世の削平、土盛等が著しく、遺構・遺物はほとんど残っていなかった。最も南側に設定した第2トレンチでは、縄文時代晩期の土坑のほか、弥生時代後期と考えられる溝や住居跡、古墳時代の住居跡や、奈良時代から平安時代にかけて利用されたと考えられる井戸跡などが検出された。この井戸は、二段に掘り込まれるもので、井戸枠木材は縦板を組み、四隅に柱を立てて、横棧木で保持する構造を持つ。また、包含層からは縄文時代晩期の刻目突帯文土器片や剝片などがみつき、周辺に縄文晩期の生活跡が広がっていたと考えられる。

恭仁京跡推定地も堂ノ上遺跡に継続して発掘調査を行い、南北50m・東西約3.5mのトレンチを設定し、造成土を除去し、遺構等の確認を行った。しかし、遺物・遺構等を包蔵する土層は検出できず、旧表土を削平したのちに床土を入れているものと考えられる。

(野島 永)



調査地位置図(1/50,000)

資料紹介

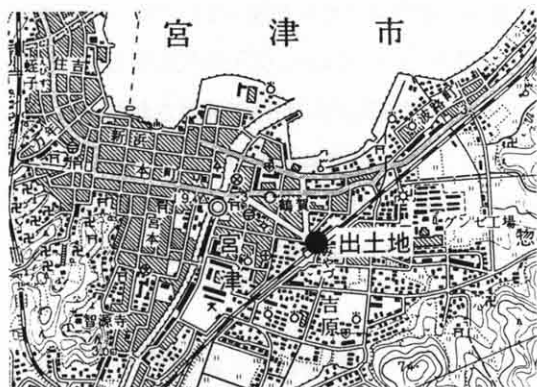
宮津城跡出土のヨーロッパ陶器

引原 茂治

1. はじめに

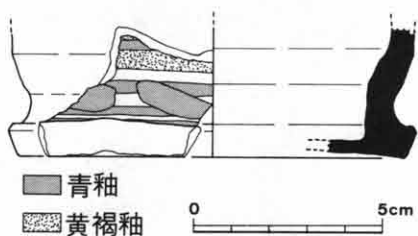
今回紹介する資料は、宮津城跡第6次調査で出土したものである。調査地は、京都府宮津市の北近畿タンゴ鉄道宮津駅の駅舎の地点である。この場所は、宮津城内堀の南東隅付近と考えられる。調査では、内堀とその両側の石垣の一部などを検出している。この内堀内からヨーロッパ陶器が出土した。^(注1)

2. 出土したヨーロッパ陶器について



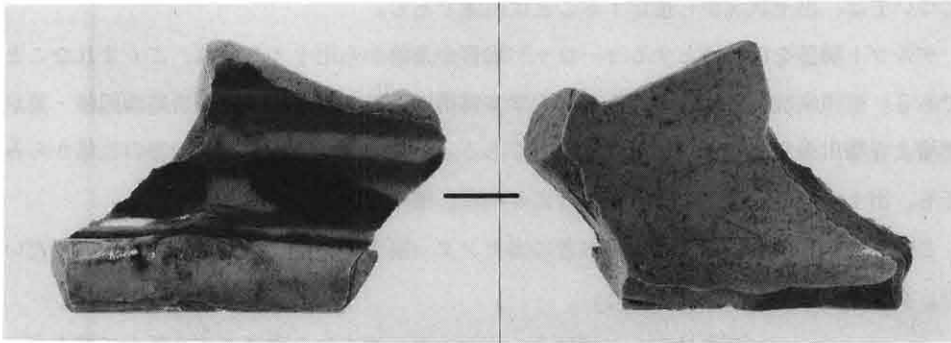
第1図 出土地位置図(1/25,000)

出土したのは、底部付近の小片である。胎土は精良で、いわゆる肌色を呈し、金属成分とみられる茶褐色微細粒子を含む。軟陶である。内外面とも施釉するが、底部は無釉である。外面は、鉛白釉を化粧掛けして、青釉・黄褐釉で絵付けする。内面は、鉛白釉のみである。復原底径は、10.2cmであるが、小片であるため、明確なものではない。



第2図 ヨーロッパ陶器実測図

形態は、体部が底部付近でくびれており、いわゆる「アルバレルロ」形の広口壺になるものと考えられる。このような形態のものは、日本では、水指などの茶道具として伝世している。体部に葉文が描かれているものもあり、「たばこ葉水指」などと呼ばれている。17世



第3図 ヨーロッパ陶器(ほぼ原寸大)

紀にオランダ・デルフト窯で生産されたものと考えられている。紹介資料は、復原底径からみて、MOA美術館所蔵のものと類似した丈の高い筒形の器形と考えられる。

3. 小結

17世紀前半頃には、海外への陶磁器の注文製作が行われる。朝鮮半島や中国などのほか、ヨーロッパへも及んでいる。当時、日本に請求されたヨーロッパの陶器には、このような特別な注文によるもの、生産地で日本に輸出することを意識して作られたもの、薬品などの容器として輸入されたものなどがあることが考えられている。今回紹介した資料のような「アルバレルロ」形の壺形容器については、注文陶器であるのか、なんらかの容器の転用であるのか、明確でない。いずれにしても、当時請求されたヨーロッパ陶器は、日常に使用されたものではなく、茶道具などとして用いられたものとみられる。

伝世しているデルフト産の茶陶には、織部陶風のものなどがある。ヨーロッパ陶器が茶道に導入された背景に、古田織部や小堀遠州などによって確立された「武家の茶道」・「きれいさびの茶」の影響が考えられる。ヨーロッパ陶器や中国への注文品である古染付・祥瑞などの磁器は、千利休によって大成された「侘び茶」になじむものではない。このような意味で、紹介資料は、「侘び茶」以降に展開した江戸時代の茶道の一端を物語るものとも言えよう。

宮津城は、天正8(1580)年から翌9年にかけて、細川氏によって築城された。慶長5(1600)年の関が原の戦いに伴い、東軍に与した細川氏は西軍方の攻撃を受け、舞鶴の田辺城に籠城するが、その際に宮津城を自焼した。その後、京極氏によって、元和9(1623)年から寛永13(1636)年にかけて再建された。京極氏以後、城主の交替や天領となった時期があったが、城自体は、京極氏以来大きく改変されることはなかったようである。以上のことから、今回の紹介資料は、京極氏以降のものと考えられるが、投棄時期・流入時期など

については、出土状況から推定することは困難である。

デルフト陶器をはじめとするヨーロッパ陶器が遺跡から出土するのは、ごくまれなことである。前田家加賀藩邸跡である東京大学本郷構内遺跡^(注1)や長崎県平戸市出島商館跡・東京都増上寺徳川秀忠墓などが知られるのみである。請求されたヨーロッパ陶器の性格からみても、出土することの少ない遺物と考えられる。稀有な例として紹介する。

この小文執筆にあたり、調査担当者の当センター調査員鍋田 勇氏からご教示いただいた。文末ながら、記して感謝したい。

(ひきはら・しげはる=当センター調査第2課調査第2係主任調査員)

注1 鍋田 勇ほか「宮津城跡第6次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第37冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990

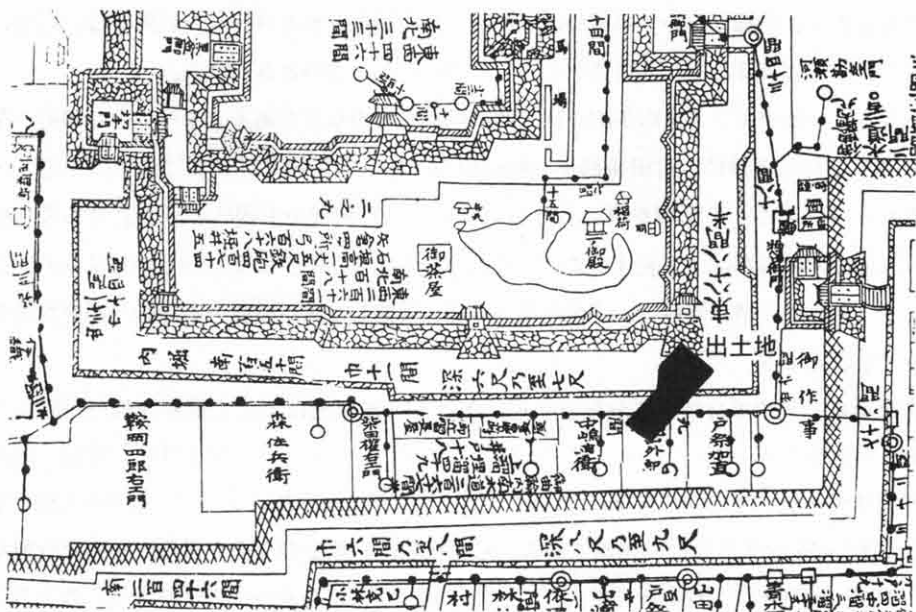
注2 西田泰民「出土した輸入陶磁器類について」(『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書』4 第1分冊 山上会館地点の調査 東京大学) 1990

参考文献

茶道資料館『江戸時代の茶陶 -海外への注文-』 1983

小学館『世界陶磁全集22 世界(三)』 1986

ニュー・サイエンス社『月刊考古学ジャーナル』No.340 1991



参考図 「宮津鶴賀城之図」による出土地推定位置図

センターの資料活用状況

センターの普及・啓発事業の一環として、資料の活用も計っているが、写真資料の掲載許可件数が年毎に増加している。以下、1990年度に実施した「資料の貸出」・「資料の掲載等」を掲示しておく。

1 資料の貸出一覧

	申請書	貸出資料	点数	目的	期間	
1	向日市文化資料館	舞塚古墳出土 人物埴輪	1	常設展「長岡京の歴史と文化」に展示	平成2年4月1日～平成3年3月31日	
2	府立丹後郷土資料館	志高遺跡出土 縄文土器・磨製石剣	6	常設展「丹後の歴史と文化」に展示	平成2年4月1日～平成3年3月31日	
		高山12号墳出土 環頭大刀柄頭ほか	61			
		野崎古墳群出土 家形埴輪・鏡形土製品ほか	5			
3	府立山城郷土資料館	前中世墓出土 青磁碗・和鏡ほか	一括	常設展「南山城の歴史と文化」に展示	平成2年4月1日～平成3年3月31日	
		内田山A-3号墳出土 家形埴輪	1			
		上人ヶ平古墳群出土 蓋形埴輪ほか	2			
		上人ヶ平埴輪窯跡出土 家形埴輪	1			
4	亀岡市教育委員会	太田遺跡出土 弥生土器・石器ほか	17	常設展「亀岡の歴史と文化」に展示	平成2年4月1日～平成3年3月31日	
		千代川遺跡出土 弥生土器・須恵器	14			
		北金岐遺跡出土 弥生土器・木製品ほか	27			
		医王谷3号墳出土 鉄製品・玉類ほか	88			
		千代川・桑寺遺跡出土 八葉蓮華文軒丸瓦	2			
		篠・西長尾奥1号窯跡出土 須恵器	2			
		篠・西長尾1号窯跡出土 須恵器	5			

		篠・石原畑2号窯跡出土 須恵器	2		
		篠・西長尾5号窯跡出土 須恵器	2		
5	府立桃山 高等学校	伏見城跡出土 瓦類・土器類ほか	15	校内展示	平成2年4月1日～ 平成3年3月31日
6	京都府総 括調整室	平安京跡左京近衛西洞院 辻出土 金箔軒 丸・平瓦、陶磁器類ほか	151	府庁西新館ロビー展示	平成2年7月20日～ 平成2年8月31日
7	弥栄町教 育委員会	遠所遺跡出土 土器類 ・鉄器・鉄滓・木炭ほか	39	シンポジウム「丹後 と古代製鉄」に展示	平成2年8月23日～ 平成2年8月27日
8	府立山城 郷土資料館	上人ヶ平遺跡出土 軒瓦類・墨書土器ほか 興戸遺跡出土 須恵器・土師器ほか 内里八丁遺跡出土 須恵器・石帯ほか 塩谷古墳群出土 須恵器・埴輪 奥大石古墳群出土 蛇行状鉄剣・白玉 ヌクモ古墳出土 銅鏡・鉄器・玉類 阿婆田窯跡群出土須恵器 遠所遺跡群出土 須恵器・鉄滓ほか 各遺跡写真パネル	6 16 15 10 一括 一括 10 一括	企画展「発掘成果速報 －平成元年度の調査か ら－」に展示	平成2年8月27日～ 平成2年10月20日
9	向日市文 化資料館	長岡京跡右京第105次出 土 呪符木簡・土器類	10	特別展「木に記された 歴史」に展示	平成2年8月29日～ 平成2年11月20日
10	亀岡市教 育委員会	野崎4号墳出土家形埴輪 私市円山古墳出土 円筒埴輪 塩谷5号墳出土 巫女形埴輪 内田山A-3号墳出土 家形埴輪 上人ヶ平7号墳出土 馬形埴輪 上人ヶ平14号墳出土 蓋形埴輪	1 2 1 1 1 1 1	第10回企画展「丹波の 埴輪－1500年の時を越 えて－」に展示	平成2年9月6日～ 平成2年10月12日

		石本遺跡出土 木製黒漆塗鞍 正垣遺跡出土琴形木製品	1 1		
11	府立丹後郷土資料館	千代川遺跡出土 石帯・墨書土器ほか 桑飼上遺跡出土 須恵器・土師器 篠窯跡群出土 須恵器 阿婆田窯跡群出土 須恵器・紡錘車 遠所遺跡群出土 須恵器・鉄滓ほか 園部垣内古墳出土 三角 縁仏獣鏡(センター寄託)	12 一括 10 12 一括 1	開館20周年記念特別展 「山陰道の考古学」に 展示	平成2年9月17日～ 平成2年11月22日
12	城陽市教育委員会	パネル「王の墓と民の生活の復原」	1	「ふるさと創生展」展示のため	平成2年9月20日～ 平成2年11月20日
13	八尾市教育委員会	志高遺跡出土有樋式石剣 北金岐遺跡出土 木製田舟・弥生土器 太田遺跡出土 石剣・J文線刻土器片	2 2 2	特別展「銅鐸と古代のまつり」に展示	平成2年9月20日～ 平成2年11月30日
14	加茂町教育委員会	恭仁宮跡空撮パネル 平安京跡空撮パネル 都城位置図パネル 恭仁宮跡発掘調査パネル	2 1 1 1	「かもまつり」に展示	平成2年10月25日～ 平成2年10月30日
15	八木町教育委員会	千代川遺跡写真パネル 篠窯跡群写真パネル 黒田古墳写真パネル 塩谷古墳群写真パネル 各種イラストパネル	3 1 1 2 6	八木町秋季文化祭に展示	平成2年11月1日～ 平成2年12月3日
16	木簡学会	長岡京跡右京第285次・第310次出土 木簡	5	木簡学会・研究集会での展示	平成2年11月30日～ 平成2年12月3日
17	龍谷大学文学部	平安京跡左京近衛・西洞院出土 骨製サイコロ	1	12月展「娯楽今昔ーたのしかったあの遊びー」に展示	平成2年12月4日～ 平成2年12月8日
18	宇治市歴史資料館	羽戸山遺跡出土 弥生土器(壺・甕) 隼上り古墳群出土 耳環 西隼上り遺跡出土 中国製青磁椀	2 8 1	企画展「考古遺物でみる宇治の歴史と文化」	平成3年1月25日～ 平成3年3月29日

II 資料の掲載等一覧

	申請書	提供資料	点数	内容	目的	期間
1	大阪府教育委員会	千代川遺跡出土 弥生土器	1	撮影	大阪府立弥生文化博物館展示映像製作	撮影日 平成2年4月27日
2	京都府職員研修所	塩谷5号墳出土巫女形埴輪 モノクロ写真	1	掲載	『研修情報』特集号	
3	(財)楽美術館	平安京出土華南三彩盤 4×5判リバーサル	1	貸出 複製	楽焼研究資料として	貸し出し期間 平成2年7月4日～ 平成2年7月10日
4	(財)日本はきもの博物館	石本遺跡出土 下駄	2	復原 製作	特別展「出土資料にみる一下駄の変遷」展に展示	
5	弥栄町教育委員会	遠所遺跡製鉄工場の復原図 4×5判リバーサル	1	貸出 掲載	「丹後と古代製鉄」シンポジュームの案内状	貸し出し期間 平成2年7月26日～ 平成2年8月26日
6	京都考古刊行会	黒田古墳出土 双頭龍文鏡 モノクロ写真	1	掲載	『京都考古』第57号	
7	向日市文化資料館	長岡京跡右京第105次 検出井戸状遺構 35mmモノクロネガ 同 上 出土呪符木簡 モノクロ写真	1 1	貸出 製作 掲載	特別展「木に記された歴史」の展示目録及び展示パネル作成	貸し出し期間 平成2年8月29日～ 平成2年11月20日
8	亀岡市教育委員会	野崎4号墳出土家形埴輪 モノクロ写真 私市円山古墳検出遺構 モノクロ写真 同 古墳出土円筒埴輪 モノクロ写真 塩谷5号墳出土巫女形埴輪 モノクロ写真 内田山A-3号墳出土家形埴輪モノクロ写真 上人ヶ平遺跡出土馬形埴輪 モノクロ写真 上人ヶ平遺跡検出遺構 モノクロ写真 上人ヶ平14号墳出土蓋形埴輪 モノクロ写真 石本遺跡出土木製黒漆塗鞍 モノクロ写真	1 3 1 1 1 1 2 1 1	掲載	企画展「丹波の埴輪－1500年の時を越えて－」の展示図録	

	亀岡市教育委員会	正垣遺跡出土琴形木製品 モノクロ写真	1			
		私市円山古墳発掘記録 ビデオテープ		貸出 複製		貸し出し期間 平成2年9月8日～ 平成2年10月10日
9	城陽市教育委員会	赤塚古墳出土 武人埴輪写真	1	転載	文化財講演会ポスター用	
10	(株)雄山閣出版	私市円山古墳空撮全景 モノクロ写真	1	掲載	『古墳時代の研究』 第10巻	
11	舞鶴市史編さん室	シゲツ1号窯跡全景 モノクロ写真	1	掲載	『舞鶴市史』上巻	
12	城陽市教育委員会	イラスト「王の墓と民の生活の復原」 4×5判リバーサル	1	貸出 掲載	「ふるさと創生展」 の展示図録	貸し出し期間 平成2年9月8日～ 平成2年11月20日
13	ロイヤルホテル文化教室	塩谷5号墳出土巫女形 埴輪モノクロ写真	1	掲載	ロイヤル日本史講座 パンフレット	
14	向日神社 六人部是継	長岡京跡右京第310次 出土檜扇モノクロ写真	1	提供	向日神社研究資料として	
15	木簡学会	長岡京跡出土木簡 モノクロ写真	3	掲載	『木簡研究』第12号	
16	弥栄町教育委員会	遠所遺跡復原イラスト 4×5判リバーサル 同 遺跡出土遺物写真 (弥栄町教委撮影分)	1	貸出 掲載	歴史シンポジウムの記録『丹後と古代製鉄』	貸し出し期間 平成2年10月24日～ 平成2年10月31日
17	京都府総括調整室	遠所遺跡復原イラスト 遠所遺跡発掘調査風景	1	撮影	広報テレビ「あすの京都」で放映	撮影日 平成2年11月19日
18	舞鶴市史編さん室	志高遺跡遺構写真 4×5判リバーサル 同 遺跡遺構・遺物 モノクロ写真 同 上 図面	1 4 21	貸出 掲載	『舞鶴市史』上巻	貸し出し期間 平成2年12月19日～ 平成3年2月8日
19	城陽市	「王の墓と民の生活」 復原イラスト 4×5判リバーサル	1	貸出 掲載	グラフ誌『Hello城陽』	貸し出し期間 平成2年12月20日～ 平成3年1月31日
20	(株)雄山閣出版	古殿遺跡出土案 モノクロ写真 同 上 梯子状組合 せ木製品モノクロ写真	1 1	掲載	『古墳時代の研究』 第3巻	

21	野田川町 教育委員会	休場古墳完掘状況全景 モノクロ写真	1	掲載	町報	
22	(株)創樹社 美術出版	平安京跡出土李朝白磁 鉢ほか陶磁器類	27	撮影 掲載	『小さな蓄』4月号	撮影日 平成3年1月29日
23	長岡京市	長岡京跡右京第83次・ 第105次・第310次遺構 ・遺物モノクロ写真	18	掲載	『長岡京市史』資料 編I	
24	(株)文芸春秋	遠所遺跡検出遺構 モノクロ写真 木津川河床遺跡検出遺 構モノクロ写真	2 1	掲載	『古代日本七つの謎 』	
25	舞鶴市史 編さん室	志高遺跡 検出遺構・遺物図面 シゲツ窯跡 検出遺構・遺物図面	6 1	転載	『舞鶴市史』上巻	
26	(株)集英社	遠所遺跡検出炭窯跡・ 製鉄炉跡 6×7判リバーサル 35mm判リバーサル	1 2	貸出 掲載	『集英社版 日本の 歴史』第2巻	貸し出し期間 平成3年2月26日～ 平成3年3月30日
27	大津市歴 史博物館	篠・黒岩1号窯跡 4×5判リバーサル 同 窯跡出土緑釉陶器 4×5判リバーサル 遠所遺跡全景(空撮) 4×5判リバーサル 上人ヶ平遺跡遺構全景 4×5判リバーサル 上人ヶ平1号埴輪窯跡 4×5判リバーサル 広隆寺梵鐘鑄造遺構 6×7判リバーサル	1 1 1 1 1 1 1	貸出 掲載	企画展「火の贈りも のー国づくりを支え た古代人の技術ー」 の展示図録	貸し出し期間 平成3年2月27日～ 平成3年3月12日
28	大宮町教 育委員会	阿婆田窯跡群全景 モノクロ写真	1	掲載	『管外遺跡発掘調査 概報』	
29	網野町教 育委員会	遠所遺跡全景(空撮) モノクロ写真	1	掲載	『網野町誌』上巻	
30	口丹波 史談会	八木嶋遺跡検出掘立柱 建物跡モノクロ写真	2	掲載	『丹波史談』平成2 年度末特集号	
31	府立丹後 郷土資料館	志高遺跡出土縄文土器 モノクロ写真 三河宮ノ下遺跡円形住 居跡モノクロ写真	2 1	掲載	図録『丹後の歴史と 文化』	

	府立丹後郷土資料館	同 遺跡出土装身具・土偶 モノクロ写真 大道廃寺経塚経筒埋納状況 モノクロ写真 私市円山経塚経筒埋納状況 モノクロ写真 山形古墓全景 モノクロ写真 山形古墓筒形容器出土状況 モノクロ写真	1 1 1 1			
32	府立丹後郷土資料館	豊富谷丘陵遺跡出土品 福垣北古墳群出土遺物 後青寺古墳出土遺物	一括	撮影 掲載	特別展「私たちの考古学Ⅱー由良川の遺跡ー」の展示図録	撮影日 平成3年3月12日
33	(株)思文閣出版	大道廃寺経塚経筒埋納状況 モノクロ写真 大道廃寺経塚出土経筒・経巻 モノクロ写真	1 3	掲載	難波田徹著『中世考古美術と社会』	
34	(株)雄山閣出版	長岡京市・塚本古墳出土家形埴輪 モノクロ写真	1	掲載	『季刊 考古学』第36号	
35	長岡京市	舞塚古墳検出遺構 モノクロ写真 同 古墳出土埴輪 モノクロ写真 長岡京市・塚本古墳出土家形埴輪 モノクロ写真 長岡京跡右京第310次出土遺物実測図	1 1 1 7	掲載	『長岡京市史』資料編Ⅰ	
36	朝日新聞社出版局	奥大石2号墳出土 蛇行剣	1	再録	『古代史発掘Vol 3 1988-90新遺跡カタログ』	注：平成元年11月7日・11月21日撮影済分
		ヌクモ2号墳出土 龍虎鏡	1			
		塩谷5号墳出土 巫女形埴輪	1			
		私市円山古墳出土遺構 6×7判リバーサル 35mm判リバーサル 私市円山古墳出土遺物 35mm判リバーサル	1 2 1	貸出 掲載		貸し出し期間 平成3年3月12日～ 平成3年5月31日

	朝日新聞 社出版局	上人ヶ平遺跡検出遺構 4×5判リバーサル 上人ヶ平遺跡出土遺物 35mm判リバーサル 上人ヶ平遺跡イラスト 4×5判リバーサル 奥大石2号墳検出遺構 35mm判リバーサル 遠所遺跡検出遺構 35mm判リバーサル	2 1 2 1 1			
37	(株)吉川 弘文館	大内城跡検出土壘遺構 35mm判リバーサル	1	貸出 掲載	『国史大辞典』第14 巻「中世の館」	貸し出し期間 平成3年3月18日～ 平成3年4月30日
38	京都府総 括調整室	上人ヶ平遺跡 写真パネル 復原イラスト	3 2	撮影	広報テレビ番組「あ すの京都」で放映	撮影 平成3年3月18日
39	府立丹後 郷土資料館	私市円山古墳出土甲冑 モノクロ写真	1	掲載	『丹後郷土資料館だ より』第21号	

(松井忠春)

府内遺跡紹介

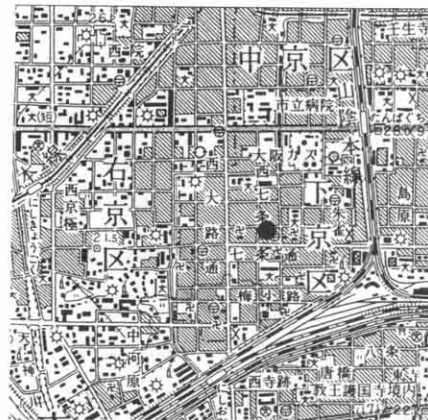
54. 平安京西市跡

平安京西市跡は、京都市下京区西七条に位置し、現在、市街地になっている。いつでも見学ができるように整備された遺跡ではないが、歴史的に見て非常に重要な存在であるので、あえて取り上げてみる。

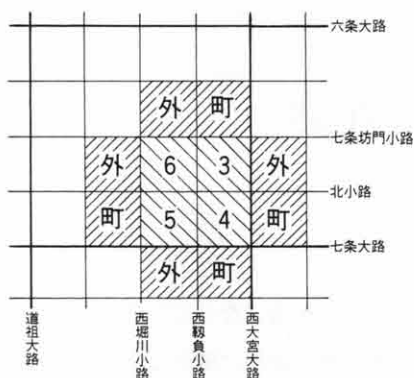
市は、都城が成立する以前には、『日本書紀』に「河内^{えがのいち}餌香市」や「大和^{つばいち}海石榴市」が見える。ただ、その実態については、ほとんどわからない。都城の成立する7世紀後半になると、市は、都城内に造られるようになる。藤原京では、その位置や規模ははっきりしないが、平城京では、八条大路に面して北側に四町四方の大きさを占めることが今泉隆雄氏や岸俊男氏の研究によって明らかになっている。長岡京では場所は不明であるが、『続日本紀』延暦5(786)年5月癸卯条に「東西市人」と出てくるので、平城京とほぼ同様に存在したことだけは推測できる。

平安京の東西市は、平城京の東西市の場合とは、その場所が異なっているのが注意される。平城京では市が八条大路の北側に面して存在したのに対して、平安京では七条大路の北側に面して存在したことがわかっている。ここに一条のズレがあったのである。大きさは、中心になる部分ではどちらも4町四方を占めたようである。

市の職務は、公営の市場で、「市塵」と史料に見えるように、多くの店が立ち並んでいることがうかがえるが、それだけではない。律令の規定によれば、東西両市にはそれぞれ市司が設けられて、①財貨を交易すること(職員令・関市令)、②器物の真偽を監視する(職員令・関市令)、③度量使用の監督(職員令)、④物価を京職を通じて大蔵省に報告する(職員令)、⑤市内の取り締まりを行う(職員令)、といった職掌を持っていた。特に、市司には、物部20人が付属しており、死刑の施



遺跡所在地(1/50,000)



西市推定概念図

行もなされた。

このように、市は単なる交易の場だけではなく、処刑が行われる場でもあり、また餓えた人や生活のできない人が集まってくるのが『続日本紀』に見えている(天平宝字3年5月甲戌条、同8年3月己未条)。すでに、平城京の段階から、市及びその周辺部には人が大勢集まる場所であったことがわかる。しかも、それだけではなく、市で交易に従事する市人は、当時の律令政府にとって重要視

されるべき存在であったようである。すでに、栄原永遠男氏が指摘されているが、天平16(744)年閏正月4日に中納言巨勢奈豆麻呂と参議藤原仲麻呂を恭仁京の市に派遣して、どこを都にすべきかという意見を徴収している。遷都という国家的重大事について、当時の閣僚を派遣して意見を聞くほど、市人は考慮されるべき存在だったのである。

さらに、市に人が集まると言う意味で注目されるべきことがある。『儀式』踐祚大嘗祭儀には、悠紀・主基両国は、北野の斎場を出発すると、それぞれが宮城の東西路をまっすぐ南下し、七条大路で曲がって朱雀大路に出てから、ともに合流して北上して朱雀門に至ると言う。これは、大嘗祭における重要なパレードで、天皇の御禊行幸とこのパレード除けば、基本的に大嘗祭の行事は秘密の行事として行われる部分と宮廷の節会からなり、パレードがなければ民衆は大嘗祭が行われていることを知ることすらないのである。特に、このパレードは、九条大路ではなく、七条大路で曲がるコースをとることに注目すれば、平安京では市が七条大路沿いにあることからして、多くの人々にこのパレードを見せる意味合いのあった可能性が高いことになろう。むしろ、平城京の段階では、このパレードがあったとすれば、八条大路で曲がった可能性がある。

次に、市の構造であるが、これはほとんど明らかではない。平安京東西市の場合、『延喜式』左右京職には、「凡町内開小徑者、大路邊町二、廣一丈五尺、市人町三、廣一丈、自餘町一、廣一丈五尺、」とあり、市人町と呼ばれ、1町が三本の小さい南北道で東西に四区分されたことが推定できる。江戸時代の裏松固禪は、いわゆる四行八門制にこれを当てはめ、東西に細長い区画が縦に並んでいた状況を復原している。その他、平安京の東西市は、中心になる4町四方以外に、周囲に1町×2町の区画が東西南北にそれぞれ拡張しており、それが「外町」を形成していたことがわかっている。

市にあった建物は、「肆」と呼ばれる店舗のほか、市人の居住したところも存在した。

これらの市人は、先の『延喜式』東西市司では、「凡市人籍帳、毎年造進」とあるように、特別の戸籍のような台帳に登録され、毎年更新されていたことがわかる。また、別のところには、「凡居住市町之輩、除市籍人令進地子、(下略)」とあり、市人とそれ以外の台帳に登録されていない人々も住んでいたことになる。

市は、養老律令(関市令)に「凡市、恒以午時集、日入前、擊鼓三度散」とあり、正午から日没まで開かれる規定である。ただ、東西両市は毎日同時に開かれるわけではない。

『延喜式』東西市司に「凡毎月十五日以前集東市、十六日以降集西市」とあって、月の前半は東市が開かれ、月の後半は西市が開かれることになっていた。しかし、都城全体が栄えている間はよいが、『池亭記』に書かれているように、10世紀にはすでに右京は荒廃してしまっており、人が住まない状況ともなれば事情は変わってくる。すでに、平安京に遷都されてまもない9世紀段階から西市の衰退は始まっていたらしい。

『続日本後紀』承和9(842)年10月庚辰条には、承和2(835)年に西市専売品を決定したが、承和7(840)年4月式で東西両市で販売されることになったため、百姓がことごとく東市へ移動してしまい、西市が衰退しはじめていたようすが見えている。どうも、専売品を設けて東市では買えないものを販売して西市を繁栄させようとした政策であったが、うまく東市側に逆手に取られてしまったようである。この件は、結局西市の専売が認められはしたようではあるが、政策のとおりには西市や右京の荒廃が進むはどめにはならなかったようである。その後の西市のことは、各種の史料上に姿を見せないため、ほとんどわかってはいないが、「西市」の地名は中世まで確実に存続している。

このように、西市の構造やいつ頃まで存続したかについては、史料上では追うことはできない。発掘調査も近年、西市跡地周辺で行われてはいる。ただ、顕著な遺構は見つかっていないのが現状である。主な調査地は、いずれも西市の中心部ではなく、周囲の外町及びその周辺部に当たる。中でも、1987年12月から1988年2月にかけて行われた調査で、板・杭などで護岸された南北方向の溝と、これに直交する東西方向の溝が見つかり、外町の区画溝と推定されている。また、この調査で、木簡をはじめ、多量の土師器や緑釉陶器が出土している。

さらに、外町の南側になり、いわゆる西市とは少しはずれているが、西市南東部に接する平安京八条二坊二町の調査で、9世紀前半の木簡や、かなりの量の木器・土器などが出土している。中でも、次の木簡は注目すべきもので、

□薬供□其事甚重

□□皇□□□皇□

(128)×33×3 081型式

とある。二行目の4・5字目は、「大子」の可能性が高く、そうすると皇太子と読むことができそうである。皇太子の病気のために、薬を求めに市へ届けられた木簡であることが推定できる。ただ、現時点ではこの木簡がいつのものかは不明であるため、たとえ、皇太子と読めたとしても、人物を特定するまでには至らない。

むしろ、これらの調査で、確実に西市に関する遺構は、先の外町の区画溝以外は、はっきりしていないのが現状である。今後は、七条大路以北の中心部が明らかになれば、市人町などの具体的なようすがつかめてくるであろう。

現在、西市及び周辺部は、市街地になっていて、全く西市があったことなどはうかがうことはできないが、七条大路に面して9世紀前半に栄えた西市が存在したことはまぎれもない事実である。平安京の流通経済を考えるうえで、東西市の存在は無視することはできず、今後の調査によって市の確実な構造、廃絶の時期、といった重要な事柄の判明することを期待したい。

(土橋 誠)

なお、大嘗祭のパレードがなぜ七条大路で曲がるのかについては、三重大学教授岡田精司氏をはじめ、(財)向日市埋蔵文化財センターの山中 章氏・清水みき氏らのご指摘による。パレードの見せる面に注目すれば、やはり、市の存在の大きさが注意される。

<参考文献>

- 藪田嘉一郎「平安京東市と安衆坊西洞院の遊里—平安京東市散考の内—」『古代文化』第132号 1969.7
- 藪田嘉一郎「芹川本東西市図について—『平安京東市と安衆坊西洞院の遊里』補訂—」『古代文化』第134号 1969.9
- 栄原永遠男「奈良時代の流通経済」『史林』55-4 1972.7
- 吉田 孝「律令時代の交易」(同『律令国家と古代の社会』 岩波書店) 1983
- 菅田 薫「京都・平安京右京八条二坊跡」『木簡研究』第6号 1984.11
- 辻 裕司「京都・平安京右京八条二坊」『木簡研究』第8号 1986.11
- 栄原永遠男「平城京住民の生活誌」・「都城の経済機構」(岸 俊男編『日本の古代9 都城の生態』中央公論社) 1987
- 和田 萃「市・女・チマタ」(森 浩一編『日本の古代12 女性の力』 中央公論社) 1987
- 菅田 薫「平安京右京八条二坊」(『平安京跡発掘調査概報』昭和63年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所) 1988
- 「平安宮・京跡」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988
- 菅田 薫「京都・平安京西市外町」『木簡研究』第12号 1990.11

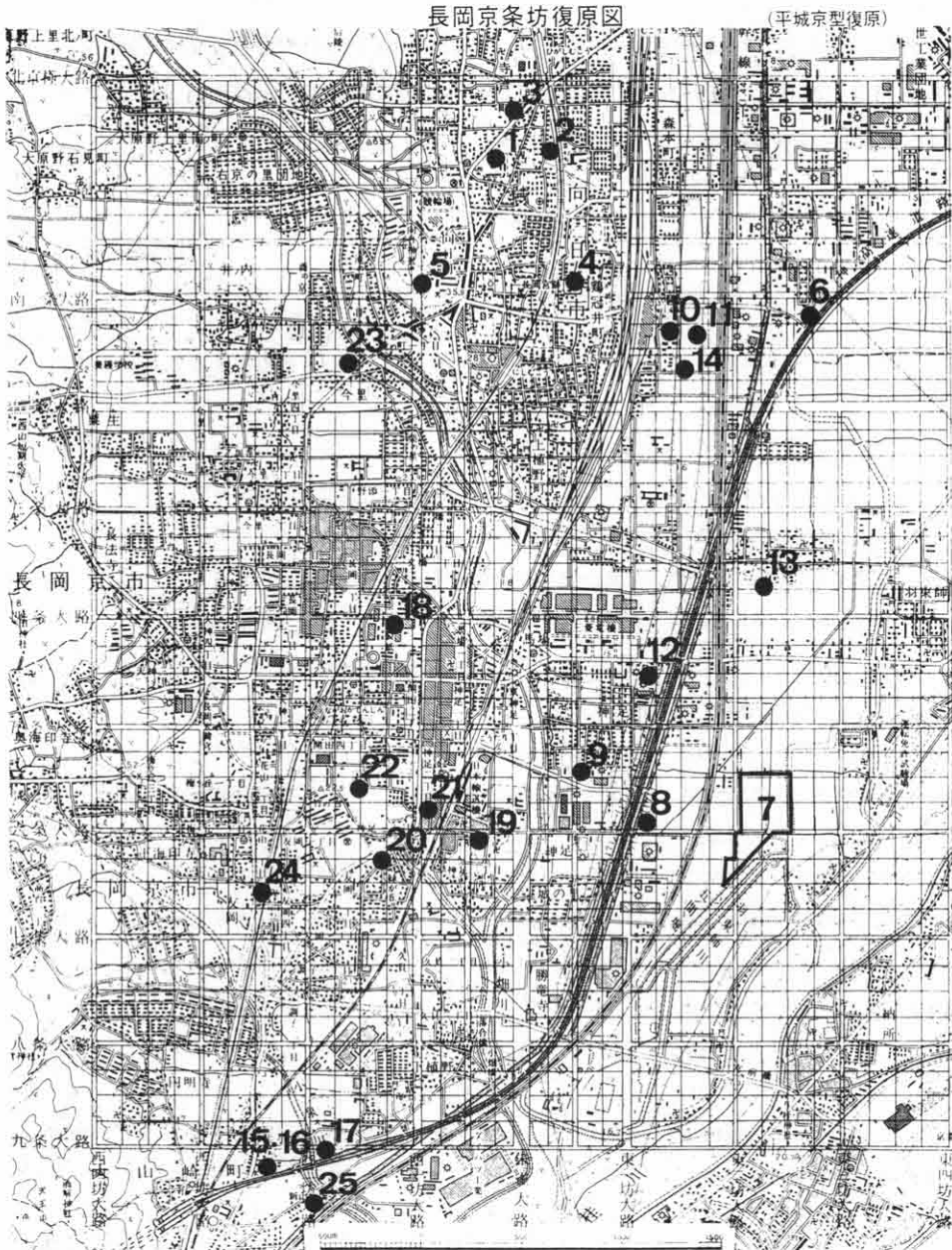
長岡京跡調査だより・40

平成3年11月27日・12月18日・平成4年1月22日に開催された長岡京連絡協議会で報告のあった発掘調査は、宮域5件、左京域9件、右京域10件、京外その他1件の計25件であった(一覧表・位置図参照)。このうち、主なものについて調査成果を簡単に紹介する。

調査地一覧表

(1992年1月末現在)

番号	次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内262次	7AN12K	向日市寺戸町西野辺25	(財)向日市埋文	10/1～2/29
2	宮内263次	7AN7M	向日市寺戸町岸ノ下7-1	(財)向日市埋文	11/14～12/27
3	宮内264次	7AN11T	向日市寺戸町殿長17	(財)向日市埋文	11/22～12/21
4	宮内265次	7AN14V	向日市鶏冠井町大極殿26	(財)向日市埋文	11/29～12/5
5	宮内266次	7AN19H	向日市寺戸町南山82-1	(財)向日市埋文	12/12～
6	左京267次	7ANXKM他	京都市伏見区羽東師菱川町	(財)京都府埋文	6/1～
7	左京270次	7ANMND-1	京都市伏見区淀樋爪町	(財)京都市埋文	4/1～
8	左京271次	7ANMSB-3	長岡京市神足下八ヶ坪36-4他	(財)長岡京市埋文	10/7～
9	左京275次	7ANMST-6	長岡京市神足芝本6	(財)長岡京市埋文	10/8～
10	左京276次	7ANESB-2	向日市鶏冠井町四ノ坪27	(財)向日市埋文	11/5～12/26
11	左京277次	7ANEJK-3	向日市鶏冠井町上古14-1	(財)向日市埋文	12/2～
12	左京278次	7ANLRB-3	長岡京市馬場六ノ坪1-4	(財)長岡京市埋文	12/24～
13	左京279次	7ANXWD-3	京都市伏見区羽東師菱川町	(財)京都市埋文	12/10～12/29
14	左京280次	7ANESH-8	向日市鶏冠井町沢ノ東	(財)向日市埋文	1/8～1/31
15	右京349次	7ANXYT他	大山崎町円明寺百々	(財)京都府埋文	4/8～
16	右京367次	7ANSDD-C	大山崎町円明寺百々・井尻	(財)京都府埋文	7/2～
17	右京368次	7ANSID-2他	大山崎町円明寺壺町田他	(財)京都府埋文	4/8～
18	右京376次	7ANKAM	長岡京市開田一丁目6-6	(財)長岡京市埋文	6/26～10/31
19	右京381次	7ANMKO	長岡京市東神足二丁目	(財)京都府埋文	8/1～10/30
20	右京383次	7ANMSC	長岡京市友岡二丁目414-4	(財)長岡京市埋文	10/1～10/22
21	右京384次	7ANMKG	長岡京市神足二丁目117-1	(財)長岡京市埋文	10/24～
22	右京385次	7ANMSI-11	長岡京市開田四丁目405-4	(財)長岡京市埋文	11/5～12/16
23	右京386次	7ANIFC-5	長岡京市今里更ノ町13-1	(財)長岡京市埋文	1/13～
24	右京387次	7ANMNT	長岡京市友岡西畑31他	(財)長岡京市埋文	1/7～
25	算用田遺跡	1K-16	大山崎町円明寺宝本	(財)京都府埋文	5/21～



▽番号は一覧表・本文 () 内と対応

調査地位置図

宮内第263次 (2)

(財)向日市埋蔵文化財センター

宮内北辺官衙・森本遺跡を調査対象とする調査。検出遺構は、3時期に分けられる。1期は縄文時代で、土坑3基。2期は長岡京期で、掘立柱建物跡4棟・柵3条・井戸1基・宮内道路の側溝等。3期は中世で、土坑・耕作溝等からなる。長岡京期の建物跡は、井戸を伴った小規模な雑舎的性格をもつもので、少なくとも2時期の変遷の跡が認められる。

左京第276次 (10)

(財)向日市埋蔵文化財センター

左京二条二坊七町、東二坊坊間小路を対象とする。長岡京期の遺構は、東二坊坊間小路西側溝の他、東西または南北方向の溝群、柵・井戸群・土坑・石組遺構等がある。石組遺構は、長さ約5m・幅約1.3mの長方形土坑の両側縁に人頭大の石を列状に組み並べ、底部にも石を敷く特異な施設である。調査地は、迷路状に走る溝によって区画されており、前記の石組遺構や多数の井戸の存在等から特殊な土地利用のあり方がうかがわれる。性格としては、水を多量に使う施設(酒造・醸造・染物所)がうかがいあがる。

右京第376次 (18)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

右京五条二坊一町と開田古墳群を対象とする。調査地は、標高22m前後の低位段丘上にあり、古墳8基・古墳時代後期の方形竪穴式住居跡8基・長岡京期の掘立柱建物跡3棟・土坑等が確認された。古墳はすべて削平を受け、墳丘や埋葬部は残らないが、周溝を巡らす一辺約9～12mの方形墳で、溝内から須恵器・土師器・埴輪類が出土した。築造時期は、5世紀後半から6世紀前半とされ、古墳の検出密度や調査地外への続き具合からみて、さらに広範囲に分布するものと見られる。なお、長岡京期の土坑に草食動物の骨を埋納する例がみられ、さらに古墳の周濠から和同開珎等の錢貨が10数枚束ねて出土したことから、古墳の破壊に伴って鎮魂や地鎮等の祭祀が行われたことがうかがわれる。

(辻本和美)

センターの動向 (3. 11~4. 1)

1. できごと

- 11.1 吉澤富士夫文化庁記念物課長、河原純之主任文化財調査官、堤 圭三郎理事、遠所遺跡(弥栄町)現地視察
天若遺跡(日吉町)現地説明会
- 2 第9回講演会開催(別掲)
- 7~8 全国埋蔵文化財法人連絡協議会
役員会(於:東京都)出席(松阪局長、
今村・木村両主事)
- 11 長岡宮大極殿祭出席(松阪局長、
安藤調査第2課長)
平安京隣接地(京都市)関係者説明
会
- 15 平安京隣接地(京都市)発掘調査終
了(8.19~)
- 16 長岡京跡左京第241・267・268次調
査(京都市・向日市)関係者説明会
- 18 第2回安全衛生委員会
- 19 平安京跡(京都市西陣)発掘調査開
始
コンピューター委員会
- 20 興戸遺跡第11次調査(田辺町)関係
者説明会
- 21~22 全国埋蔵文化財法人連絡協議
会コンピューター等導入研究委員会
(於:京都市・向日市)出席(松阪局長、
中谷次長、小林次長、安田係長、辻
本係長、土橋、三好調査員)
- 22 内里八丁遺跡(八幡市)関係者説明

会

- 23~25 日本考古学協会1991年度大会
(於:仙台市)出席(奥村係長・柴
調査員)
- 26~12.7 奈良国立文化財研究所研修
(水田遺跡調査課程)出席(竹原調
査員)
- 26 興戸遺跡第11次調査発掘調査
終了(10.1~)
- 27 長岡京連絡協議会
- 28 久美浜町文化財講座、豊中歴史
同好会 遠所遺跡見学
- 29 長岡京跡右京第349・367次調査
(大山崎町)現地説明会
遠所遺跡・遠所古墳群(弥栄町)
現地説明会
- 12.2 木津川河床遺跡(八幡市)発掘調
査開始
中国陝西省研修生、姜宝蓮さん
当センター研修(~13)
- 5 樋口隆康副理事長、西山塚古墳
(木津町)現地視察
- 6 都出比呂志理事、西山塚古墳現
地視察
第32回役員会・理事会(於:京
都堀川会館)福山敏男理事長、松
阪寛支常務理事、中沢圭二、川上
貢、上田正昭、藤井 学、足利健
亮、都出比呂志、藤田价浩、堤

- | | |
|---|--|
| <p>圭三郎の各理事、吉田三枝子、前川靖典の各監事出席</p> <p>7 西山塚古墳現地説明会</p> <p>10 松阪局長、西山塚古墳現地視察</p> <p>10～11 宮津高校社会人講師派遣(森、石崎調査員)</p> <p>13 都出比呂志理事、西山塚古墳現地視察</p> <p>18 長岡京連絡協議会</p> <p>20 算用田遺跡(大山崎町)現地説明会</p> <p>1. 8 堂山窯跡・八木城跡(八木町)発掘調査開始</p> <p>10 池尻遺跡(亀岡市)関係者説明会、発掘調査終了(8.19～)</p> <p>13 嗎岡遺跡(加悦町)発掘調査開始
口仲谷古墳(八幡市)発掘調査開始</p> <p>21 教育関係法人連絡協議会研修会(於：京都府学校給食会)</p> <p>22 長岡京連絡協議会</p> <p>23～24 全国埋蔵文化財法人連絡協議</p> | <p>会近畿ブロック会議(於：京都市)出席(松阪局長、中谷次長、小林次長、安田係長、杉江主事)</p> <p>28 木津川河床遺跡関係者説明会</p> <p>29～2.6 奈良国立文化財研究所研修(基礎研修)出席(木村主事)</p> <p>31 職員研修会「コンピューターによる画像処理について」</p> <p>2. 普及啓発事業</p> <p>11.2 第9回講演会「日本の稲作・京都の稲作－考古学から考える－」(於：京都会館)－講演：竹原一彦「1800年前の水田－八幡市内里八丁遺跡－」、工楽善通「発掘されたさまざまな水田」、高谷好一「アジアにおける日本の稲作」、－討論「日本の稲作・京都の稲作－考古学から考える－」司会：佐原 眞、パネラー：工楽善通、高谷好一、井之本 泰、竹原一彦(安藤信策)</p> |
|---|--|

受贈図書一覧 (3.11.1 ~ 4.1.31)

(財)北海道埋蔵文化財センター	調査年報3 平成2年度、(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第69~72集
苫小牧市埋蔵文化財調査センター	とまこまい埋文だより NO.25
(財)茨城県教育財団	沢田遺跡
(財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター	栃木県文化振興事業団10年のあゆみ、栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター年報 第1号、栃木県埋蔵文化財調査報告 第111集
栃木県埋蔵文化財センター	栃木県埋蔵文化財センター通信やまかいどう NO.1
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団年報 9~10、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書 第123集
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	埼玉考古学論集 設立10周年記念論文集、研究紀要 第8号、埼玉県埋蔵文化財調査事業団年報 11、埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第88・96~105集
(財)君津都市文化財センター	(財)君津都市文化財センター設立10周年記念誌 10年のあゆみ、(財)君津都市文化財センター設立10周年記念展 昔、むかしの上総、研究紀要 5、(財)君津都市文化財センター発掘調査報告書 第45~46・48~49・53・55~56・58~60集
(財)山武都市文化財センター	(財)山武都市文化財センター発掘調査報告書 第9~10集
神奈川県立埋蔵文化財センター	神奈川県立埋蔵文化財センター年報 10、神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 21
横浜市埋蔵文化財センター	横浜市埋蔵文化財センター年報 1、調査研究集録 第8冊
富山県埋蔵文化財センター	埋文とやま 第36号、平成3年度特別企画展 貝塚一縄文ムラの風景一
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター年報 5
(財)長野県埋蔵文化財センター	長野県埋蔵文化財ニュース NO.33
(財)岐阜県文化財保護センター	文化財保護センターだより 第2号
(財)愛知県埋蔵文化財センター	埋蔵文化財愛知 NO.27
(財)滋賀県文化財保護協会	文化財教室シリーズ NO.121~123、滋賀文化財だより NO.160~161
滋賀県埋蔵文化財センター	滋賀県埋蔵文化財センター 滋賀埋文ニュース 第140・141号
(財)大阪市文化財協会	葦火 35号
(財)枚方市文化財研究調査会	ひらかた文化財だより 第9号、枚方市文化財年報 X、枚方

(財)元興寺文化財研究所
 (財)広島県埋蔵文化財センター
 (財)広島県歴史科学教育事業団
 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
 (財)香川県埋蔵文化財調査センター
 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

栃木県教育委員会
 志木市教育委員会
 小矢部市教育委員会
 岐阜市教育委員会
 豊橋市教育委員会
 鈴鹿市教育委員会
 近江町教育委員会
 羽曳野市教育委員会
 美原町教育委員会
 小野市教育委員会
 総社市教育委員会

山口市教育委員会

高知県教育委員会

禰原町教育委員会
 土佐山田町教育委員会
 佐賀県教育委員会

佐伯市教育委員会

朝地町教育委員会
 三光村教育委員会

国立歴史民俗博物館

市文化財調査報告 第25集

(財)元興寺文化財研究所通信 NO.39

ひろしまの遺跡 第47号

(財)広島県歴史科学教育事業団調査報告書 第1集

草戸千軒町遺跡一第44・45次発掘調査概要一

いにしへの讃岐 第2号

高知県文化財団埋蔵文化財調査報告書 第1集

栃木県埋蔵文化財調査報告 第106・114集

志木市の文化財 第15・16集

小矢部市埋蔵文化財調査報告 第31～33冊

千畳敷 II

豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第13集

鈴鹿市埋蔵文化財調査報告 X

近江町文化財調査報告 第4・9・11～14集

羽曳野市埋蔵文化財調査報告 24

美原町史第3巻 史料編2(中世)

小野市文化財調査報告 第9集

総社市埋蔵文化財調査年報1 平成2年度、総社市埋蔵文化財発掘調査報告 9

山口市埋蔵文化財地図、山口市埋蔵文化財調査報告 第35～39集

埋文こうち 第3・4号、高知県埋蔵文化財調査報告書 第26～34集

禰原町埋蔵文化財発掘調査報告書 第1集

土佐山田町埋蔵文化財報告書 第7～9集

佐賀県文化財調査報告書 第100～104集、特別史跡名護屋城、並びに陣跡 6

大分県佐伯市総合運動公園建設事業に伴う緊急発掘調査報告書 1

朝地地区遺跡群発掘調査概報 V～VI

三光地区遺跡群発掘調査概報 1

歴博 第50号、歴博フォーラム 邪馬台国時代の日本、国立歴史民俗博物館映像・音響資料概要、国立歴史民俗博物館館蔵

千葉県立房総風土記の丘

成田山靈光館

板橋区立郷土資料館

世田谷区立郷土資料館

太田区立郷土博物館

出光美術館

茅ヶ崎市文化資料館

氷見市立博物館

石川県立歴史博物館

福井県立若狭歴史民俗資料館

今立町歴史民俗資料館

沼津市歴史民俗資料館

名古屋市博物館

愛知県清洲貝殻山貝塚資料館

愛知県陶磁資料館

一宮市博物館

斎宮歴史博物館

大津市歴史博物館

野洲町立歴史民俗資料館

(銅鐸博物館)

彦根城博物館

大阪府立弥生文化博物館

兵庫県立歴史博物館

神戸市立博物館

明石市立文化博物館

芦屋市立美術博物館

春日町歴史民俗資料館

(財)有年考古館

資料概要、国立歴史民俗博物館研究報告 第29～34集

千葉県立房総風土記の丘年報 14

なりた NO.51・52

企画展 農業の誕生・民俗の発見

資料館だより NO.15、世田谷区立郷土資料館史跡ガイド
第2集

太田区立郷土博物館だより 第25号、特別展 「絵画にみる海
苔養殖」

出光美術館館報 第76号

資料館だより NO.76

平成2年度 氷見市立博物館年報第9号

石川れきはく 第22号

特別展 躍動する若狭の王者たち—前方後円墳の時代—

—いまだて芸術館開館記念—いまだての華—

資料館だより 100

企画展 原始の狩・漁・採集

特別展 愛知の銅鐸

愛知県陶磁資料館研究紀要 10

一宮市博物館だより NO.11・12、愛知県一宮市同者遺跡発
掘調査報告書

平成2年度 斎宮歴史博物館年報、企画展 古代の祈り—天神
信仰と大宰府

博物館だより 第8号、開館1周年記念特別展 旅人からのメ
ッセージ—街道・宿場・旅—

銅鐸博物館開館3周年記念特別展 銅鐸から銅鏡へ—卑弥呼
の鏡を探る—

彦根城博物館だより 16

大阪府立弥生文化博物館だより「弥生倶楽部」創刊号

わたりやぐら 第21号、歴博ニュース NO.37

博物館だより NO.38

特別展 江南の文物、明石市立文化博物館総合案内

なりひら 第4号、特別展 表六甲の狩人たち—旧石器・縄文
時代の人びとと暮らし—

特別展 近衛家と春日—春日町ゆかりの近衛家歴代とその文
化—

有年考古館藏品図録

奈良国立文化財研究所飛鳥資料館
鳥根県立八雲立つ風土記の丘
(財)日本はきもの博物館

茨城大学
早稲田大学考古学会
早稲田大学校地埋蔵文化財調査室
立教大学
東海大学校地内遺跡調査団
皇学館大学史料編集所
神戸女子大学史学会
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
別府大学付属博物館

鶴川第二地区遺跡調査会
国立国会図書館
雄山閣出版株式会社
(株)名著出版
(株)ジャパン通信社
鎌倉考古学研究所
富来町文化財調査委員会
(財)古代学協会
(財)冷泉家時雨亭文庫
(株)同朋舎出版
和泉丘陵内遺跡調査会
古代を考える会
淡神文化財協会

朝鮮学会
鳥取市遺跡調査団
「土佐の須恵器」発行会

(財)向日市埋蔵文化財センター
京都府教育委員会
宮津市教育委員会市史編さん担当室

飛鳥の源流
八雲立つ風土記の丘 NO.111
日本はきもの博物館だより 44

博古研究 創刊号～第2号
古代 第92号
早大埋蔵文化財調査室月報 NO.78～81
MOUSEION 37

東海大学校地内遺跡調査団報告 2
鈴木敏雄氏遺稿・旧蔵資料目録
神女大史学 第8号
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第6号、岡山大学
構内遺跡調査研究年報 8 1990年度
別府大学付属博物館だより NO.35

真光寺・広袴遺跡群 VI
日本全国書誌 NO.1831～1833
古墳時代の研究 第8巻
歴史手帖 第218～220号
月刊文化財発掘出土情報 107号
神奈川県鎌倉市山ノ内 巨福山建長寺境内遺跡
富来町福浦港ヘラソ遺跡発掘調査報告 Ⅲ
土車 第60号、古代文化 第394～396号
志ぐれてい 第38・39号
ポリネシア人—石器時代の遠洋航海者たち—
和泉丘陵内遺跡発掘調査報告書 I・II
古代を考える 53
淡神文化財協会ニュース 第18・19号、柳杭遺跡発掘調査報告書、元町遺跡発掘調査報告書
朝鮮学報 第140輯
鳥取市文化財報告書 28～30
四国考古学叢書 2

平成2年度 財団法人向日市埋蔵文化財センター年報都城3
京都府指定・登録文化財等目録(付録 市町村文化財目録)
市史編さんだより 第2号

宇治市教育委員会
京都府立総合資料館
(財)京都府文化財保護基金
三和町郷土資料館
京都市考古資料館
京都市歴史資料館
向日市文化資料館
宇治市歴史資料館
京都大学考古学研究会
佛教大学総合研究所
京都橘女子大学図書館
足立鐵次先生遺稿集「続々上豊富
村関係資料」刊行会
綾部の文化財を守る会
口丹波史談会
京都考古刊行会
宗教法人 平等院

足利健亮
上野 章

小山雅人

寒川 旭
中嶋利雄
松井忠春
森島康雄

宇治市文化財調査報告書 第2冊
総合資料館だより NO.90
文化財報 NO.75
第5回企画展 むらのかじや
京都市考古資料館年報 昭和62・63年度
京都市史編さん通信 NO.228
向日市文化資料館報 第6・7号
宇治文庫3 巨椋池
第43とれんち
佛教大学総合研究所報 第1号
京都橘女子大学図書館研究紀要 第18号
上豊富村関係資料集

綾部の文化財 第33号
口丹波史料 7
京都考古 第63・64号
平等院 阿弥陀堂中島発掘調査報告

ふるさと歴史舞台5 英雄伝説が彩る跡地
小杉町埋蔵文化財発掘調査一覧 1990年度、大門町埋蔵文化
財調査報告 第6集、井口城跡発掘調査概要、特別企画展
ひすい—地中からのメッセージ—
東アジアの古代文化 9・19・27・30・31・33・38・39・
45・48・51・69号
土と基礎 NO.408
舞鶴地方史研究 第24号
博物館の環境管理、通度寺案内図、慶州の歴史と博物館
中近世土器の基礎研究 VII

編集後記

年度末になり、あわただしい日々が続きますが、情報43号が完成しましたのでおとどけます。

本号では、本年度大きな成果を得た通り古墳群の詳細と、高田山経塚から出土した中国製の青白磁について紹介しています。また、一昨年度に調査した宮津城跡で出土したヨーロッパ陶器についても紹介されており、比較的興味深い号になりました。よろしく、ご味読ください。

(編集担当=土橋 誠)

京都府埋蔵文化財情報 第43号

平成4年3月25日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075) 933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
Tel (075) 441-3155 (代)